―第二十一回全国高校生童話大賞―

受賞作品集

目次

ご挨拶　全国高校生童話大賞実行委員会　委員長　岡田秀二……1

☆銀賞

歳月を紡ぐ鳥　熊倉友音（東京都　かえつ有明高等学校二年）……4

二セモノ　深澤未知佳（神奈川県　日本女子大学附属高等学校三年）……16

おはなしや　樋田優（長野県　佐久長聖高等学校二年）……30

花の夢　空井慧（愛知県立時習館高等学校二年）……44

☆受賞作品一覧……56

☆第一回～第二十回受賞作品　作品一覧……59

☆選考委員プロフィール……71

ご挨拶

第二十一回全国高校生童話大賞実行委員会　委員長　岡田秀二

「〜賢治のまちから〜全国高校生童話大賞」にとっては二〇二〇年が二十周年の記念すべき年でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から作品募集そのものを中止し、記念事業についても一年後の二〇二一年に、当初の予定事業内容を大幅に縮小し、実施しました。そんな事情があって、これまで触れることが出来ずにきた点について、はじめに少し触れておきたいと思います。

それは、二〇二一年七月に、北海道・北東北の縄文遺跡群がユネスコの世界文化遺産に登録されたことに関連します。一九八〇年代以降、地球環境問題がタイトルになり、その影響もあって、宮沢賢治作品と賢治文学に対する世界の関心が高まり、賢治の縄文的精神性についても注目されることが多くなっていました。日本では早くから梅原猛氏や田口昭典氏らによってその点の掘り起こしが進んでいました。賢治作品の多くが自然との共生を思想・文化とする縄文時代の精神をよく表しており、それがイーハトーブの内容なのではないかという訳です。今後一層注目されるであろう縄文文化・縄文時

代の精神性への注目に関し、賢治文学が果たした役割が少なくないという点を指摘しておきたかったのです。

ところで、新型コロナ感染症の拡大が止まらず、現在は第八波と言われています。この間、人々の生活は大きく制約され、高校生活は入学以来一度も解放されることのない生活が続いてきました。そうした中でも多くの高校生がこの「全国高校生童話大賞」に応募してくれました。

厳正な審査が行われ、その結果、今年度は銀賞四点と、銅賞八点、ノミネート作品二十一点が選出されました。例年同様何れの作品も高校生の豊かな感性が表現されていますが、コロナ禍の影響が少なからずあり、人間の歴史や今後について落ち着いて再考した、深みのある作品が多かったように思いました。そうした中でも「夢」を描き、持ち続けることの大切さを深層として感じ取っている内容のものが多く、勇気づけられました。是非、多くの皆さんに味わっていただきたく思います。

それにしましてもこの「全国高校生童話大賞」事業には多くの皆さんのご協力をいただいております。各高校の先生方、作品を応募下さった高校生の皆さん、多くの時間を割き選考にあたってくださった審査委員の皆さん、ご後援、ご支援をいただきました全ての方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

銀賞

『歳月を紡ぐ鳥』

歳月を紡ぐ鳥

東京都　かえつ有明高等学校二年　熊倉友音

夜長より四辺にわずかな明るさを残し、お月様が浮き足だって顔を覗かせた十八時過ぎに、ぽたぽたと街灯は、橙色の光のハシゴを下へとおろしました。居酒屋が軒並みを連ね、思いがけず訪れた来客との結びつきを得るまいかと、この地に住まう者たちは、宴を開くのが常でありました。

はてさて、そういった往来激しい通りと打って変わって居酒屋の軒並みを背負う形で佇む裏山の雑木林には、お月様の明かりも、街頭の明かりも通ることはありません。されど、かまびすしい居酒屋の明かりよりは暗くも、雑木林の辺りは夜深くなるにつれて、木々の根から葉の先まで鮮やかに彩られて見えました。雑木林を照らすおぼろげな光は飛び魚でした。古来より神や仏さながら長らくの間、また今この時共に、飛び魚はこの地に住まう者たちがその美しさに崇拝しておりました。飛び魚は、波長を合わせて水面より遥かに高く飛び上がり、透き通る羽に優しく冷えた空気を映しては、おぼろげな曲線を描く月に向かって落ちていきます。ぽちゃん、ぽちゃん。夏の初めよりは、心寒く、秋の終わりよりかは柔らかい夜の中、彼らは木々に囲まれた池の水面にまた一つ二つと花を咲かせては、誇り高く辺りに音を響かせていました。彼らは慢ずるが如く大層まばゆい羽を持ち、時折たなびく風よりも色鮮やかで、天を目指して舞い上がれば雑木林は一層明るく輝いていました。

その輝きを熱心に見つめる年老いたカラスが一羽、池のほとりに腰かけて飛び魚の明かりに目を奪われていま

した。カラスは飛び魚のことを忌み嫌っていました。しかし目が離せずにいたのは、どこか心の隅には置けない憧れや嫉妬心に駆られていたからでありました。ある時は、いっそのこと飛び魚を一匹残らずたいらげてしまおうと思い、ある時は町まで至り、噂話に花を咲かす提灯行列に飛び魚のいやしい噂を聞かせてやろうとも考えたものでした。けれど決まって、皆口をそろえてこう言うのでした。

「あわれなカラスだ。ただ輝くことさえ叶わないくせに」

「ひねくれものは帰っておくれ」

カラスは、飛び魚達も、商店街の住民も、ひねくれた自分も嫌いで、嫌いでいつも一人でいました。

そんなカラスに喋りかける変わり者が一人、雑木林に一人細々と暮らしていました。寂れたトタン屋根が今にも飛ばされそうなプレハブ小屋がありまして、南京錠が丁寧にドアにかけられていても、これまた薄いベニヤ板で作られたドアは枠組みにきちんと合わさることなくして、隙間から油絵具と埃と酒の匂いを漂わせていました。誰かが変わり者と思えば、脳裏にふらりと現れるのは、かくもしてこの掘っ立て小屋に住まう変わり者の翁でありました。

さて、この翁、一人悲しくこの地に住まうのには人知れぬことわけがありました。とりわけ、かまびすしい居酒屋を連ねる街並みをうとましく思っているわけでも、どこからともなく訪れる者が癪にさわるといったことでもありませんでした。いっそ誰かと共に過ごす楽しき日々に思い明け暮れていたほどでありました。されど、翁は、別れにたいそう怯えていました。この翁の人生の望みただ一つ。これがいかに翼をこしらえて、月か太陽か彗星かともかく地上より昇る地で尚も堂々たる姿で駆けるであろう旧友と再び出会うことでした。まだ十にも満たないころから、翁は空高く飛ぶ鳥や天を覆い隠す翼に恋焦がれていました。あんまりにも翼を愛おしがる姿と

て、最初は愉快な幼い子に見えますのが、次第に自分にありもしない翼にのみ心惹(ひ)かれる姿に辟易(へきえき)した者たちは、一人また一人と去り、気づけば翁は寂しき少年でありました。そんな寂しき少年の唯一の友が、鳥類学者であった父親でありました。されど、村の万病で寝たきりになってしまった父親は、泣きじゃくる幼き頃の翁にこんなことをおっしゃったのでした。

「泣くな友よ、私は長年の夢を叶え、空高くへと舞う鳥となる。いつの日にかお前さんが空高く飛ぶ最初の日に私の姿を現そう」

旧友の元へと出向く時、誰かを愛おしく思えば、別れに面を合わせねばならない時が来ると知り翁は、恐ろしくてたまらなかったのでした。

ひねくれものと怖がりは最初、てんで挨拶さえ交わす事もありませんでしたが、翁はカラスの眩(まばゆ)いばかりの黒い翼を羨ましく思っていました。それのみか、飛び立つカラスの天一面を曇天(どんてん)で覆い隠す姿にさながら神の使いのような、神妙さを感じていたのでした。

ですから、素知らぬふりをして、互いを見過ごせぬほど翁は、カラスに憧れて焦がれていたのでした。

ある日の事です。今日も今日とて、飛び魚をうとましそうに見つめるカラスと杉の木一本分の合間を取って翁は独り言を装って口を開きました。

「私は、鳥となるのですよ」

そう仰(おっしゃ)いますが、カラスはからきし見向きもしません。なにせ、ひねくれもののカラスですから、自分と話をしようとする変わり者など居てくれるはずがないと思っていたのでした。

「昨夜、私の憧れる姿を描いてみたが、誰か私の絵を見てくれはしないでしょうか」

今度は、カラスは横目で翁をいちべつしました。―誰か―という言葉が気がかりであったのです。翁とカラスの辺りには、飛び魚達はいるけれど、激しく飛び回る彼らの耳には翁の呟くような声色は届いていないはずです。そうすると、―誰か―は、小さな願いを惜しくも聞いてしまったカラスしかいないのです。それでもカラスは返事をしませんでした。翁のただの独り言であれば、言葉を返す必要もありません。それにもしも、カラスには見えていない他の誰かに声をかけていたとしたら、カラスの勘違いであるということは、めっぽう不甲斐なく思えたのです。二人の間に又もや正味の悪い静寂が訪れました。ふと水面に映ったカラスの姿に覚えのあるなつかしさがとつとして体を巡る疾走感に翁は、ゆくりなく言を紡いでいたのでした。

「カラスさん。あなたのような立派な翼があればと何度思ったことか」

名を呼ばれたカラスは、今度は呆気にとられました。翁は杉の木ばかりの距離から三歩ほど大股でカラスに向かって進みますと、相撲取りのごとく銀の額に縁どられた絵をカラスに押し付けました。支えきれずに草の上に転がった絵は、これまた、翼の生えた鯉なのか、はたまた潜水艦なのか、もしくはプロペラ機なのか。とにかく粗末な筆入れと油が乾くまもなく塗り重ねられた絵の具が一緒くたになった黒々しい物体がまがまがしく描かれていました。

「なんだ、これは」

カラスは、突然の出来事に思わず身をひるんでしまう思いでした。

「わたしが成るべき姿です」

翁は今までとどめていた言葉に身を取られたような様子でありました。

「お願いです。私に飛び方を教えてはくれないでしょうか」

カラスは、なんて歯がゆい頼みだろうと、目の前に立つ翁がひどく気の毒に思えました。もはや、翼の無い人の子の願いが叶うはずないのです。カラスは幾分申し訳なさそうに頭を下げました。

「わしは、もう年老いていて、遠くへ勇ましく飛ぶことも出来ず、お前さんに教える術など心得てはいないのだ」

実のところ、若年の頃カラスは翼を持つ者達の中で先ず飛行に頭角を現していました。

黒光りする素晴らしい翼を自分でも鼻にかけていたほどです。カラスは、孤独ともほど遠く、あわれでも、ひねくれものでもありませんでした。それがなにもなしに飛び魚がこの地により崇められて以来、皆まるっきりカラスに無関心でありました。カラスも最初は、皆の気を引こうと試みてはみたものの、誰一人として古びたカラスの自慢話に耳を傾けず、目新しい飛び魚に専心していました。

「わしでは無く、飛び魚にご教授いただいたらどうだ」

カラスは半ばやけっぱちになって言いました。カラスはどこか期待していたのです。元より自分に声をかけてきた変わり者が、あわれで、ひねくれた自分に努めて頼み事をするなど、久しい出来事でありました。けれど、いとも簡単に心が移り変わってしまえばそれまでだと思ったのでした。

「いいや。カラスさん、あなたしかいないのです。飛び魚も翼を持ち、たいそう美しい。しかし、月より高く、太陽より高く羽ばたけるのはあなたしかいないのです」

わびしい心にじいんと温もりが生まれることにカラスは戸惑い、震え、泣き出しそうになりました。カラスは水面に揺れる赤いもみじをじっと見つめ一つ言の葉を落としました。

「わしの一代はもう短い。せめてもの暇つぶしに付き合ってやろう」

紅葉が雑木林を橙色に染めるころ、池のほとりで翁は、カラスを模範にして両腕を力いっぱい広げては、翼じ

みた両腕を勢いよく弾ませて、地面をけり上げては、すぐに地面に転げ落ちていました。翁は非常に熱心でしたので、カラスは、翁のこっけいな姿を笑うのをはばかられました。飛び魚たちは、と言うと、そんな彼らの姿にとても興味をしめしませんでした。翁に厳しくも熱心に飛ぶ術を教えるカラスも、一心不乱に地上より飛び出そうと短い腕を上下に仰ぐ翁の姿も、飛び魚たちには相手にするほどの美点が無いと思えたのでした。

　まもなくして翁にとってカラスは、偉大な師であり、心より慕う友となったのでした。カラスとて、決して諦めることなく両腕を広げて池のほとりで今日も稽古に励む翁に対し、いずれは本当に空高くへと羽ばたくのではないかと雄志を抱いていたのでありました。

「今日こそは空高く羽ばたいてみせましょう」

　擦りむいた膝小僧をかばいながら、ぎこちなく歩くのを見て、カラスは三回ほど首をよこに振りました。

「地を歩くことさえままならないのならば、飛ぶことなど到底ない無理難題である。今日の稽古は終いとしよう」

　そうカラスに叱られた翁は、唇の肉を突き出して不服であると無口にカラスに反抗しました。まるで母親におんぶをねだる子供じみた面持ちにカラスはついに、はっと笑みをこらえきれずに、体を小刻みに震わせました。長い年月が過ぎたであろう翁の歳を重ねたしわくちゃな顔に乗った、わざとらしい子供じみた表情がやけに見合っていたからでありました。

「商店街で聞いたが、お前さんは実に変で面白い。なかなかどうして、そこまでして飛んでみたいと思うのだ」

　翁は、どうしたものかと首をすくめました。翼もない人の子が空を飛ぶなど無謀であると幾度となくとがめられても、いまだ踏ん切りつかずに年老いたのは、旧友との再会を心待ちにしているからでありました。けれども、このことをカラスに話してしまえば、飛べるようになったらすぐさまこの地を離れると示唆しているよう

で、ようやっと出来た友人に別れを告げる事に、いたたまれなさを覚えたのでした。もごもごと口ごもる翁にカラスは首をかしげましたがそれ以上は何も言葉を続けませんでした。カラスとて長い人生を過ごしてきたのです。おそらく翁には、安易には言葉に出来ぬほどの覚悟があるのだと心づいたのでした。

しかし、夜が暮れ、日が明けても翁は、翼を得る事叶わずしていました。翁はカラスに申し訳なく思うようになりました。また、カラスも翁に同情と葛藤を募らせていました。時が経つにつれて、カラスは昔のように長いこと翼を広げて飛んだり、空中で旋回してみせたりという芸でさえも難しく、今となっては小一時間ほど稽古に付き合っただけで、へとへとにくたびれてしまいます。これほどまでに自分を友として慕い、憧れを抱いてくれた翁に自分が弱って、衰える姿など見せたくはなかったのでした。そして、とうとう身が凍てつくほど寒く深い冬が訪れますと、カラスは地を歩くことも億劫になりました。「これでは自分の浅ましい姿で翁を落胆させてしまう」そう悩んだカラスは、翁に「もう半生短く、これ以上手を貸してやることは出来ない」と伝えますと、一言、翁は挨拶にやって来てこう言いました。

「それなら春になり、池に張る氷が全て溶け終わった時、どうかもう一度だけ、あの池のほとりへいらっしゃってください」

まだ辺りは、ほの暗くも、柔らかい風がカラスを包み込みますと、ふやけた瞼を開けました。

「ああ、冬が終わったのか」

カラスは静かに呟くと、のっそりと立ち上がり巣穴から這い出て、春一番の空気を肺いっぱい吸い込みました。やわい木漏れ日でさえも、真っ暗な巣穴の中で何日も眠りについていたカラスにとってはいささか苦いものでした。カラスが眠っていた長い間、毎日のように同じ夢が繰り返されていました。一度や二度のことならすっ

かり頭から抜け落ちているはずが、くっきり、はっきり脳裏に張り付いているのです。夢であったことを再び思い出そうと目覚めたばかりの頭をひねったその時、少し離れた杉の木の陰から人影がばっと飛び出しました。勢いよく、まるでカワセミのように木々の間をすり抜け、ウサギのように地面を力いっぱい蹴り上げて、弾む体はまるっきり池から飛び出した飛び魚そのもので、春風の中にざわりと舞ったのです。カラスは思わず息を吸い込み、目を大きく見開き、その人の後ろ姿から視線を移すことなどとうに出来ませんでした。その人の凛々しい背中をカラスはよく知っていました。そして、今、確かにカラスの眼にははっきりと見えたのです。空へと舞う翁の背中にそれはまごうことなき美しき立派な白銀の翼を。

それはあまりにも一瞬の出来事でした。刹那、翁の体は水しぶきを立てて池にドボンと落ちますと、その勢いに飛び魚がいっせいに天高く舞い上がりました。そうして彼らは「こんなにも高く舞い上がるのは初めてのことだと」嬉しそうに声も弾ませていました。

水にぬれた頭がひょっこり池から顔をのぞかせました。そうして、カラスと視線が合わさると、恥ずかしそうに、けれどどこか誇らしげに翁は、頬を染めて笑みを浮かべました。

「どうです、冬の間ずっと鍛錬していたのですよ。良かった、今日は今までで一番高く飛ぶ姿をお見せすることができた」

カラスは、子供のように目を輝かせる翁に同情や葛藤など忘れていました。

「ああ、素晴らしかった。こんなにも感動させてくれたのは後にも先にもお前さんだけだ」

そう言うと、カラスは特別大きく翼を広げ、呼吸を整えると、振り返って雑木林いっぱいに届く声をたからかに上げました。

「背中にお乗りになされ。お前さんにどうしても見せたい景色があるのだ」
翁は、転びそうになりながら池のほとりよりカラスの元へと駆け出すと、息を切らして、堂々としたカラスの背中にまたがりました。カラスが翼を仰げば、翁の体はすでに地面より離れ、飛び魚達や、どんな大木でさえも、自分よりもずうっと小さく見えました。
ふと、目の前に在る赤くごうごうと燃える火の塊が空を紅(あか)く色付けました。朝焼けです。翁は思わずがむしゃらに手を伸ばし、指先さえ太陽に届かずともあまりの空の広さに無我夢中(むがむちゅう)でありました。カラスも、果てしなく広がる空の風景や、空高く舞う自分を誇らしく思えたのは今日が初めてに思えるほど久しくありました。雲を抜け、薄くぼやけた白い月に差し掛かったところでふと、カラスは夢の話を思い出しました。なんてことない夢の話であったはずですが、どうしても翁に伝えずにはいられなかったのでした。
「ずっと同じ夢が続いていたのだが、可笑(おか)しな夢なのだ」
ついとかけられたカラスの奇妙な話に、翁は夢中でもっと高くにと伸ばしていた右手を丁寧に下げて、聞き耳を立てました。
「わしは、枕元で泣いている少年を見上げているのだ。奇妙なのは、わしはカラスなのに、不思議とその少年やら、布団が市松柄であることを知っている気がしてならない」
そこまで打明かして、ふとカラスはおかしく思いました。というのも、いつもは弁がたつ翁が何か言おうと口を開いては、また言葉を飲み込むようにして唇を震わしては、黙りこくるのを何度も繰り返していたからでした。それでも、カラスは言葉を続けないといけませんでした。
「そうして、わしはいつも同じ言葉を少年にかけている」

「泣くな友よ、私は長年の夢を叶え、空高くへ舞う鳥となる。いつの日にかお前さんが空高く飛ぶ最初の日に私の姿を現そう」

互いの声が、全く同時に重なり合いました。

カラスは随分驚いて「どうして知っているのだ」とも言いたげに眼をぱちくりさせていましたが、翁はとても幸福そうに顔をほころばせると、鼻をすすりました。

「もう、きっと、その少年が泣き続けることはないでしょう。大丈夫ですよ」

羽ばたく翼の仰ぐ空は、ようやっと朝を迎えいつまでもでも二人を見守っているのでした。

＊選考委員コメント＊

『歳月を紡ぐ鳥』

石野　晶……童話としては難解な文章ですが、詩的な表現で独特な世界観が描かれ、美しい情景が目に浮かびます。空を飛ぶことに人生を費やした翁に、ひねくれもののカラスが飛び方を教えることでいつしか両者の間に友情が芽生えてきます。その果てに待っているカラスの正体と過去の約束に、静かな感動がこみあげて来ます。

牛崎　敏哉……飛ぶことを夢見る「翁」と、飛ぶことを教えることになる「カラス」。カラスは池にすむ「飛び魚」にあこがれていた。翁の背中に白銀の翼が現れ、カラスとの夢が重なるというラストで、「翁」の文字の「羽」に気づかされた。なるほど古風な文体による「翁」出現だが、その言い回しで時折文意が分かりにくいのが残念。

夏井　敬雄……壮大な時間と空間の物語です。翁の父は鳥類学者でした。その父の夢は鳥になること。いつの日か、空高く舞う鳥になって、我が子に会いに来ると約束してこの世を去って行きます。物語はひねくれ者のカラスと怖がりで変わり者の翁、そして、カラスが忌み嫌う飛び魚たちとの関わりによって展開します。構想の面白さに感心しながらも、作品の完成度、特に文章表現において、さらなる推敲が必要だと感じました。

やえがしなおこ……詩情豊かで、古風な文体にも特徴のある作品。月夜の晩に、飛び魚が水面から跳ね上がる描写も美しい。登場人物であるカラスと翁、どちらかに物語の視点を定めれば、より分かりやすくなり、読み手も心を添えることができると思います。

銀賞

『ニセモノ』

ニセモノ

神奈川県　日本女子大学附属高等学校三年　深澤未知佳

八月十五日。

「こんにちは」

にこやかに挨拶するご近所さん。

「こんにちは」

私はいかにも面倒臭そうに返事をした。お姉ちゃんならこんな時でも可愛らしく愛想良く百点満点の対応ができるのだろう。しかしこの時の私にそんな余裕は無かった。あんなに大変な事が起きたというのに皆どうして普通に過ごしていられるのだろう。なぜ普通に挨拶なんてできるのだろう。やっぱりあの事を引きずっているのはもう私だけなのだろうか。

そんな事を考えているといつの間にか家に着いていた。

「ただいまー」

重い玄関のドアをゆっくり開ける。

「おかえりー」

懐かしい声がした。気のせいだと思った。

それでもわずかな希望を胸におそるおそるリビングの扉を開く。

一カ月前、私のお姉ちゃんが亡くなった。なんの前触れもなく突然に、交通事故で。まだ十四歳なのに。
そのお姉ちゃんが今私の目の前でさも当然のようにポテトチップスを食べている。一体今何が起こっているのか。亡くなったはずの人が蘇るなんて。頭の中が混乱して何も整理できない。
「お姉ちゃん？」
お姉ちゃんはにこりと不思議な笑みを浮かべた。困ったときに笑顔になる、お姉ちゃんの癖。私の目の前にいるこの人は間違いなくお姉ちゃんなのだと確信させられた。呆然と立ちつくす私をお姉ちゃんは何も言わず自分の部屋へ連れて行った。死んだはずのお姉ちゃんが今私の手を握って歩いている。信じられない。でも階段の途中で気づいてしまった。お姉ちゃんは私の質問に決してうん、そうだよとは答えなかった。お姉ちゃんではないということだろうか。もしかして幽霊？　そういえば今ってお盆……！　嫌な予感が頭を駆け巡りだんだん私の手を握って歩いているお姉ちゃんが恐ろしくてたまらなくなってきた。
私が急に立ち止まったせいだろう。お姉ちゃんが私の方を振り返る。今からでも逃げなきゃ！　と思った次の瞬間、
「言っておくけど幽霊とかじゃないから」
私の考えを見透かしたような発言に驚きを隠せない。しかし一安心したのも束の間。
「まぁでもそれに近い存在なのかもね」
「私、あなたのお姉ちゃんのニセモノなの」
もう何もかも訳が分からない。これ以上何かあったらきっと心臓がもたないだろう。
話を詳しく聞いてみると、どうやらニセモノは性格、仕草など隅々までお姉ちゃんと全く同じのいわゆるコ

ピーのような存在らしい。

　そんな話もちろん信じるはずがない。よく出来た夢、ドッキリ、幻覚、色々な可能性を考えた。けど、この際正体なんて何だっていい。どんな形でもいいからお姉ちゃんとまた一緒に居たい。一緒に学校に行って家に帰ってご飯を食べたりゲームで遊んだり、まだやり足りないことがたくさんあるのだ。心の奥底でモヤモヤしていた思い出の数々が一斉に溢(あふ)れ出して気がついたらニセモノを受け入れている自分がいた。お姉ちゃんなら本物でもニセモノでもいいなんて我ながら最低だと思う。でも亡くなったはずの大切な人が目の前に現れたら誰だってこうなるだろう。

　しかしそれにしてもニセモノは本当にお姉ちゃんにそっくりだ。きっとニセモノと本物を並べられてどちらが本物か見抜けと言われても私には不可能だろう。ニセモノは私が凝視(ぎょうし)しているのに気がついて

「何か他に聞きたいことはある？」

と何だかちょっと楽しそうに尋(たず)ねた。聞きたい事はもちろん山ほどある。どこから来たとか人間なのかとか。でもこれだけは聞かないといけない気がしていた。私のためにも、お母さんやお父さんのためにも。

「何のためにお姉ちゃんのフリをしているの。何か目的があるならはっきり言って」

　語気が荒くなったのはきっとお姉ちゃんのマネをする存在をやはりどこかで許せていないからだろう。

「そんなに怒らないでよ。強(し)いて言うなら私の運命の選択をしてほしいってだけ！」

「選択？」

「そう！　私を消すか消さないかってこと！」

　なんだそれ。責任重大じゃないか。私は明日からの一週間以内にニセモノを消すか消さないか決めなければな

らないそうだ。この時の私はまだ事の重大さに気づいていなかった。こうしてニセモノお姉ちゃんと私の奇妙な一週間は幕を開けたのだった。

その日はまだ事情が飲み込めなくてまともにニセモノの顔も見れずに一日が終わった。ベッドに入ってこの刺激的な一日を振り返った。未だに全て夢なのではないかと疑ってしまう。しかしもしこれが現実だと言うのならば私はニセモノの運命を選択しなければならない。その晩、私はたくさんたくさん考えた。ニセモノという存在はやっぱり生理的に受け付けない。でもお姉ちゃんとこれからも一緒にいたい。そして決断した。一週間ニセモノお姉ちゃんとの生活をとことん楽しもう！　そして最終日にニセモノを消そう！

八月十六日。まず朝起きて

「おはよー」

と言いながらリビングに下りると早速ニセモノと対面した。まだ慣れなくて一瞬硬直したが昨日の夜のことを思い出してなるべく普通に接した。

「お姉ちゃんもおはよう」

そういえばお母さんたちはニセモノに気づいていない。そもそも娘の死を忘れている。姉の遺影なども撤去されている。ニセモノがやったのだろうか。不安が強くなった。

午後からは私とニセモノでお出かけをした。今日はもともと本物の姉と映画を観に行く約束をしていた。私は映画で感動して泣いたことがまだ一度も無い。

「今日は特にポップコーンを買ったから食べることで頭がいっぱいで内容が何も入ってこなかった！」

と不満そうに言うとニセモノは声をあげて笑った。笑っているが目はウルウルしている。ただの映画でいくらな

んでも泣きすぎだ。姉はよく笑うしよく泣く。そういうところにも私は憧れている。
「お姉ちゃんってほんと涙もろいよね」
「あのシーンで泣かない人なんてなかなかいないよ」
二人しておかしくなって笑い合う。私は姉との暖かい時間が返ってきたような気がしてもう二度と離すまいとその幸せを噛み締めていた。
家に帰ったら私たちは休む暇もなく一緒にテレビゲームをした。二人ともゲームは大好きだけど実はお姉ちゃんはゲームがとてつもなく下手だ。一方、私はというとゲームの腕にはまぁまぁ自信がある。そんな二人が一緒にゲームをやると当然衝突する。
「ちょっとお姉ちゃんそこどいてよ！」
「あ！　間違えて味方に攻撃しちゃった！　ごめん！」
「なんでそんなに下手なのよ！」
「ひどい！　もう！」
今日も相変わらず口喧嘩は勃発した。けど、なんだか今日はちょっと楽しい。いつも通り自然に仲直りして一日が終わった。
夜に私はまたネガティブになって余計な事を考えていた。今日一日とっても楽しかった。楽しかったけど……。お姉ちゃんをニセモノで穴埋めしているんだと思うと自分が惨めに思えてくる。そんなモヤモヤを抱えながらいつの間にか私は眠りについていた。
八月十七日。この日もニセモノと一日中一緒にいた。ニセモノは相変わらずボロを出さずにお姉ちゃんを続け

ている。ふとした時にニセモノが偽物だということを忘れてしまう。
八月十八日。ニセモノと一緒に自由研究をした。フルーツポンチが盛られたお皿の真ん中にサイダーのボトルを立ててその中にメントスを流し込む。まるで噴水のようにサイダーが噴き上がる。
「すごい！　すごい！」
と喜ぶニセモノはお姉ちゃんそのものだった。この瞬間から私の中で何かが大きく変わった。
八月十九日。お姉ちゃんと一緒に冷やし中華をつくった。これも夏休みの宿題の一環だ。お姉ちゃんが慣れた手つきできゅうりを素早く切っていく。一方私はトマトのヘタに悪戦苦闘中だ。お姉ちゃんは他のことはさっぱりダメなのに料理だけは大得意なのだ。完成した冷やし中華は誰がどの部分を作ったのかが分かりやすく表れていた。
八月二十日。今日はもともと友達と遊ぶ約束をしていた日だった。お姉ちゃんと一緒にいたい気持ちは山々だが久しぶりに友達にも会いたいので今日くらいは仕方がない。待ち合わせ場所に着くと彼女はもうとっくに着いていた。
「さきちゃん！」
さきちゃんは可愛くて優しくて頭も良くて私の大好きな友達だ。今日は学校のプールの開放日なので私たちは学校に行くことにした。学校に着くまで他愛もない話をたくさんした。
「宿題終わった？」
「全然終わりそうにないよ。日記とか特に後回しになるよね」
「旅行とか行かないと書くことないしね」

気がついたらもう学校はすぐ目の前にあった。夏休みの小学校はなんだかいつもと違う特別な感じがする。ワクワクする。久しぶりに来たからだろうか。学校のプールに行くと思ったよりも人がたくさんいた。

「五年生はここのレーンを使ってくださーい」

そう呼びかける先生のいるレーンに行って私とさきちゃんは泳いで遊んで喋り倒した。水しぶきや蝉の声、みんなの笑い声も相まって今年一番「夏」を感じた。

帰り道、私はさきちゃんに訊いた。

「さきちゃんはもし今はもういない大切な人のニセモノが現れて、その人のことを消すか消さないか選べって言われたらどうする？」

「なにそれ」

さきちゃんはキョトンとしている。当然だ。私も最初は理解が追いつかなかったのだから。

「うーん。よく分かんないけど私だったら消しちゃうかもな。なんか怖いし、ニセモノを残しておくのって本物にも申し訳なくない？」

「……。そうだね」

言葉に詰まった。さきちゃんが言ってることは正しいと思った。

私はさきちゃんと別れたあとも考えた。一般的に見てもさきちゃんと同じような考えの人は多いだろう。

「でもそれって実際体験してないからじゃない？　いざ目の前にニセモノが現れて一週間一緒に過ごしても消すなんて言えるの？」

心の中の私がそう問いかける。さきちゃんは私の気持ちを何も分かってない。八つ当たりだとは分かっている

がさきちゃんに対して少し怒りが湧いてきた。きっとこの時の私が求めていた答えは
「消さなくてもいいんじゃない？」
だったのだろう。誰かにニセモノに縋りついている自分を肯定して欲しかっただけなんだ。私は完全にニセモノを偽物だと思えなくなっていた。
その夜、夢を見た。お姉ちゃんのお葬式の夢。お坊さんがちょうど皆にお話をしているところだった。
「人は残念ながら失ってからその大切さに気づきます。その人が生きているときにもっとこうしておけば良かった、あれを言ってあげれば良かった、そうやって後悔していく生き物なのです」
まるで私に言われているかのようだった。お葬式が終わっても皆ずっと泣いていた。そんな中、お姉ちゃんの遺影だけは笑っている。その遺影の隣には何やら難しい漢字の書かれた板がある。それをじっと見つめていた私に横からお坊さんが言う。
「これはお姉ちゃんの天国でのお名前だよ」
天国での名前。そっか。お姉ちゃんはもうこの世の人じゃないんだ。お姉ちゃんはもう踏ん切りがついて天国で新しい生活を送っているのか。なのに私は……。
八月二十一日。私は昨日の夢を引きずっていた。
明日には消すか消さないか答えを出さないといけないのにどうしよう。迷宮に放り込まれたような気分だ。悩みながら朝ごはんを食べていると
「おはよー」
お姉ちゃんが起きてきた。

「どうしたの？　何かあった？」
と、お姉ちゃんが聞いてくる。さすがに本人にあなたを消すか消さないか迷ってるなんて言えない。
「別に、色々考えてただけ」
と私がそっけなく答えるとふーんと言ってどこかへ行ってしまった。
　そこからのお姉ちゃんは何かがおかしかった。まず、私たちでケーキを食べたとき。私が一つしかないショートケーキを食べようとしても何も言わなかった。いつものお姉ちゃんならショートケーキだけは絶対に譲らないのに。むしろ今日のお姉ちゃんは自分のケーキを一口分けてくれた。おかしい。お姉ちゃんはいつも優しいが好きなものは断固として譲らない人なのに。他にもゲーム中に怒りだしたり、私をいつもと違う呼び方で呼んだり、今日のお姉ちゃんはどこか様子がおかしかった。そして私は改めて思った。そうだ、この人はお姉ちゃんではなくニセモノなんだと。きっと長く一緒に過ごしすぎたからニセモノのミスが目立ち始めたのだろう。
　極めつけには、今日が私の誕生日だと勘違いして私の好きなお菓子を渡してきた。ちなみにそのお菓子も私は全く好きではないし食べたこともない。
「嬉しいけど今日誕生日じゃないよ」
「え？　そうだっけ」
　ニセモノは少々焦っているように見えた。
　違和感を覚えたまま私は最終日の夜を迎えた。お風呂に入りながら私は今までのことを思い返していた。ニセモノが来た日のこと、ニセモノとの楽しかった日々、さきちゃんに言われたこと、お葬式の夢のこと、様子がおかしかったニセモノのこと、そして、本物のお姉ちゃんとの懐かしい思い出、全部ひっくるめて私はついに決断

を下した。
その晩、私はニセモノと一緒に並んで寝た。ニセモノの体温が暖かかった。それも全部偽物なのに。
八月二十二日。今日家にいるのは私とニセモノだけ。
「お姉ちゃんもお茶いる？」
「うん。ありがとう」
今言わなければならないと思った。
「やっぱり本物のお姉ちゃんを選ぶことにしたの。ごめん」
私はニセモノがどんな表情をしているのか見ようともしなかった。傷つけてしまうことが怖かった。
「そっか。そうだよね。どうしてそう思ったの？」
ニセモノの返事は意外とあっさりしていてなんだか面接みたいだなと思った。
「言動とか仕草とか性格とか全部似てるけどやっぱり少し違う。本物のお姉ちゃんと似ていても似せ者止まりだなって思ったの」
「あなたのお姉ちゃんは特にまねできない性格だったからね。大変だったよ」
そんなことを思っていたのか。ニセモノの本音を聞いたのは初めてな気がする。
「それだけじゃない」
私にはまだ言いたいことがある。お葬式の夢でのこと……。
「お姉ちゃんはきっともう天国で幸せに暮らしてるから私も前を向かないとなって思ったの」
ニセモノは目を丸くした。そして聞こえないくらいの声で確かにこう言った。

「お姉ちゃんに似てるね」
と。まるでお姉ちゃんを知っているかのような口振りだ。でもたしかに、こんなにお姉ちゃんに似せることが出来るなら会ったことがあってもおかしくない。
「あなたのお姉ちゃんも偽物に会ったことがあるんだよ。あなたの偽物に」
どういうことだ。私の偽物もいるのか。予想のさらに上をいくニセモノの返答に困惑した。
「あなたのお姉ちゃんがまだ小さい頃にね……」
お姉ちゃんは小さい頃両親にちやほやされている生まれたての私に嫉妬していた。そこで偽物が来てこう言ったそうだ。
「君にとって都合が良い偽物の妹とちやほやされてワガママな君の本物の妹、どっちがいい?」
お姉ちゃんは迷うことなくこう答えたそうだ。
「本物が良いに決まってる」
思わず涙で視界がぼやける。お姉ちゃんのことが大好きな私でさえもニセモノと本物の間であんなに揺らいでいたのに。一瞬でもニセモノを選ぼうとしていた自分に恥ずかしくなる。
「あなたとお姉ちゃんだけじゃない。他にも色んな人が大事な選択をしながら生きている。あなたの下した決断をきっとお姉ちゃんも誇りに思うはず」
私はニセモノを誤解していた。ニセモノはただお姉ちゃんの代わりになって生きていたいだけだと思っていたけれど、本当は全部私のためにやってくれていたのかもしれない。私は思わずニセモノに抱きついた。そして人生で一番と言っていいほど心を込めて言った。

「ありがとう」
その時ふと私はあることに気がついてニセモノにこう訊いた。
「昨日あんなに様子がおかしかったのは……」すると急に周りがキラキラと輝き始めて何も見えなくなった。気づいたときにはもうニセモノは目の前にいなかった。私が消した。私の選択によって。
落ち着いてからリビングに行くと遺影が戻っていた。お仏壇もちゃんとある。日常に戻ったのだ。お姉ちゃんのいない日常に。でも今の私は以前とは違う。ただ寂しさ、辛さを我慢するだけのみじめな私ではない。姉の死をバネに今私は前に進もうとしている。

そこで彼女は日記帳を閉じた。溜まっていた夏休みの宿題の日記をようやく今消化したのだ。ニセモノと過ごした一週間は間違いなく彼女の糧になっていた。
「きっとこんな話誰にも信じてもらえないだろうな」
と彼女は呟く。
一方その頃、天国では彼女の姉と彼女によって消されたニセモノが上から彼女を見下ろしていた。
「なんでわざとあの子が自分を消すように仕向けたの?」
「だって絶対あなたならそうするでしょ」
実はこのニセモノは彼女が思っている何倍も優秀だったのかもしれない。

＊選考委員コメント＊

『ニセモノ』

石野　晶……亡くなった姉が目の前に現れ、ニセモノだと語る。ニセモノとは何なのか、主人公はどんな選択をするのかと興味をそそられる話です。主人公とお姉ちゃんの過ごす日常の部分はリアルに描かれていて魅力的なのですが、ニセモノのルールのような部分があいまいで作り物っぽさが漂い、そのちぐはぐさが気になってしまいました。

牛崎　敏哉……巧みな文章で、亡くなった十四歳の姉のニセモノと小学五年生の私とのやり取りが面白い。とはいえ、一カ月前に突然亡くなった姉の死と比べて、姉のニセモノを消す消さないというゲーム的展開には違和感が大きい。すべては天国での姉とニセモノのやりとりで終わるという結末も一工夫ほしかった。

夏井　敬雄……主人公の私は姉の死をどうしても受け入れられずにいます。そこに姉の偽物が現れ、一週間後に、偽物を受け入れるかどうかを決めろと言います。自分にとって都合の良い存在を望むとき、ニセモノが現れると知った主人公は「姉のニセモノ」との別れを決意します。「偽物よりも本物が良い」と言いながら、結局は代替物で心を慰めて生きている私たちへの皮肉を感じました。ただ、家族の生死をめぐる二重の「しかけ」と人間の命に対するせつなさとのギャップに違和感を覚えました。

やえがしなおこ……一ヶ月前に亡くなったはずの姉が、「私」の前に突然現れた。「私、あなたのお姉ちゃんのニセモノなの」と名乗る相手に、「どんな形でもいいからお姉ちゃんとまた一緒にいたい」と思う主人公。慕いつつも、コンプレックスを抱いていた姉と、本当に別れるための心の過程が、「ニセモノ」を登場させることによって巧みに描かれています。発想がおもしろいので、いくつかの設定や叙述をもう少し削れば、より良い作品になったかもしれません。

銀賞

『おはなしや』

おはなしや

長野県　佐久長聖高等学校二年　樋田（とよだ）　優（ゆう）

秋ももう終わりが近く、吹く風にはなんだか雪の匂（にお）いがする、ある晴れた日のことでした。

「おはなしや」のねずみのおじさんは、お気に入りの椅子に腰掛け、ペンを片手にうーん、うーんとうなっていました。

「おはなしや」というのは、皆さんが知っている通り、どんぐり一つと交換に、いつでも、どこでも、誰にでも、胸がわくわく、ドキドキと高鳴るようなお話を一つしてくれる、何ともすてきなお仕事の名前です。

ねずみのおじさんは、この「おはなしや」をもうずっと長いことやってきましたので、とっても素敵なお話で、森のみんなをうっとりさせるのはお手のもの。広い広い森の中を、奥の方までずっと探してみても、ねずみのおじさんよりも上手にお話を作れるおはなしやさんは、いないと言われていました。

でも、このところ、おじさんはちっともお話をしていませんでした。「おはなしや」のお店のドアの看板も、ずっと、「ただいまへいてんちゅう」のままです。

それどころか、めったに家から出てこず、たまにちらりと森の広場で見かけても、おでこにぎゅっとしわをよせ、うんうんとうなっているばかりでした。

森のみんなは、おじさんが病気にでもなってしまったのではと心配して、なんべんもおじさんの家を訪ねまし

たが、おじさんはうんうん言うばかりでちっとも答えません。
しまいには、森のみんなはあきれて、ねずみのおじさんのことを「おはなしやのおじさん」ではなく「うんうんおじさん」と呼ぶようになってしまっているのでした。
さて、ところでおじさんはと言うと、今日もやっぱり、腕組みをして、目をぎゅっと閉じてうなっています。お部屋の奥のお勝手で、火にかけっぱなしのヤカンが、しゅんしゅんと湯気をあげているのにも、さっぱり気がつかない様子でした。
おじさんの「うーん、うん」という声が次第にどんどん大きくなっていき、いよいよヤカンの音よりも大きくなるぞ、という、まさにその時のことでした。
ドンドンドン
おじさんのお店のドアに、とても大きな何かが、勢い良くぶつかる音がしたのです。
これには、思わずおじさんも、うなるのをやめてドアまですっ飛んで行きました。
「なんだ、なんだ。一体全体何事だ」
ドアを開けるとそこには、何やらとてもとても大きくて、もじゃもじゃとした茶色のものがありました。
ちらりと、いったいこれは何かしら、と思ったおじさんでしたが、おじさんがあれこれと考える前に、そのもじゃもじゃが動きはじめましたので、それが何かはすぐにわかりました。
「やあ、クマのぼうやじゃないか」
もじゃもじゃは、おじさんの声を聞くと、嬉(うれ)しそうに身をよじって、ぐっと下まで頭を下げ、かわいらしいお顔を見せました。

「こんにちは、おじさん」
「こんにちは。ぼうや」
　クマの坊やは、おはなしやさんのお得意さんです。おじさんが、広い森のどこでお話を始めても、このクマの坊やだけはいつも駆けつけて、大きな体をお行儀よくちぢこめてお話を聞くのでした。
「おはなしやさんは、今日もお休み？」
「そうだよ。やあ、せっかく来てもらったのにすまないね。悪いけど今は、どんぐりと交換できるお話が無いんだ」
　おじさんが、すまなそうに言うと、クマの坊やは首を振りました。
「ちがうよ。ぼくはね、おじさんが、あんまりにもずっとお休みするものだから、おじさんが心配になっておみまいにきたのさ」
　クマの坊やの、やさしい心配にちょっとうれしくなったおじさんは、ひげをひくひくさせながら答えました。
「そりゃあ、心配させて悪かったね。でもね、この通り、おじさんはとても元気ですよ。お見舞い、どうもありがとう」
「それは良かった」
　クマの坊やは、心底(しんそこ)嬉しそうでした。
「それならおじさん、ちょっと気が早いんだけれどね、次のお話は、いつごろ聞けそうかしら」
　さて、にこにことしているクマの坊やにつられて、これまたにこにこしていたおじさんですが、この質問には困りました。
「それはちょっと、分からないいなあ」

「どうして、分からないの？」
　クマの坊やは不思議そうです。
「お話を、忘れちゃったの？」
「いいや、ちがうんだ」
「それじゃあ、どうして？」
　ねずみのおじさんは、はたして、正直に話したものかどうかと、悩みました。というのも、おじさんにだって、自分が森で一番のお話名人だということを、誇らしく思う気持ちはあったからです。でも、坊やはせっかくお店まで来てくれたのです。うーん、うーんと二回言ってから、おじさんは、坊やには特別に教えることにしました。
「実はね、おじさんは、急にお話が作れなくなってしまったんだよ」
「ええっ！」
　クマの坊やは、真ん丸な目をくりくりと動かして、心底びっくりした様子でした。
「そんなあ。本当に？」
「本当さ」
「だって、おじさんは、森一番のおはなしやさんじゃない」
「一番でも、二番でも、とにかく今は、作れないんだ」
「それじゃあやっぱり、どこか病気なのかしら？」
「いやいや、まさか！」
びっくりしたおじさんのメガネが、かちゃんと音を立てました。

「僕はすこぶる元気さ」
　すると、クマの坊やは、さっきとはまた反対側に首を傾げて、それじゃあ、と言いました。
「おじさんは、どうしてお話がかけないんだろう」
　どうして、どうして、というクマの坊やの言葉に、ねずみのおじさんは、ちょっと困った顔をしました。
「それが、僕にもわからないのさ」
　そう、何でお話が作れなくなってしまったのかは、実のところ、おじさんにもわからないのです。
　なんべんも、なんべんも、立ったり座ったり、時には逆立ちまでして考えたりしてみましたが、考えれば考えるほど、おじさんの頭の中は、もやもやと、ミルク色の霧に包まれて行ってしまうのでした。
　そうして、霧が出てくればくるほど、どんどん、お話も作れなくなってしまうのです。
「おじさんのお話を聞けないんじゃあ、ぼく悲しいなあ」
　クマの坊やは、とてもしょんぼりとした様子で、おじさんまでも、何だか悲しくなってしまいました。おじさんのお仕事は、お話をして、森のみんな元気にすることです。何とか、ぼうやの悲しい気分を吹き飛ばせないかしらと、一生懸命考えました。
「そうだ、くまのぼうや、どうか、ここはひとつ、おじさんにぼうやの力を貸してくれないかい？」
　おじさんのお願いに、クマの坊やはすぐに頷きました。
「もちろん、いいよ」
　それから、坊やはちょっと考えて、一言つけ足しました。
「その代わりにね、新しくできたお話を、一番最初にぼくに聞かせてもらえないかしら？」

おじさんは、にっこりして頷きました。
「もちろん、いいとも！」
それから、おじさんは、ぴいぴいなっているヤカンの火を消し、お店にある中で、一番大きなひざかけを出してきて、クマの坊やと一緒に、落ち葉の上に腰かけました。
「じゃあぼうや、今、考えている途中のお話を、試しに聞いてみてくれるかい？」
おじさんがそう言って、クマの坊やに話して聞かせたのは、赤の妖精（ようせい）の国に暮らす、ひとりぼっちの青の妖精さんが、仲間を求めて、野原を超え谷を越え、旅をするお話でした。
クマの坊やは、最初は、目をキラキラとさせながら聞いていましたが、おじさんがお話をやめるころには、なんだかすこし、元気がなくなってしまっていました。
「まだまだ途中なんだけどね、どうだい？」
すると、ううん、と、坊やは首を横にふりました。
「これじゃあ、だめみたい」
おじさんは、ちょっと困って言いました。
「どんなところが、だめだったんだい？」
「うーん」
腕組みをして、二回、首をひねってから、坊やは言いました。
「なんだかね、ちょっとしかワクワクしないんだ」
「ほう」

「つまんないんじゃあ、ないけれど。でもね、ぼくが思うに、お話ってのは、もっとぞくぞくしちゃうようなものでなくちゃいけないんだ」
うーん、と、おじさんはうなりました。
「ぞくぞくかあ……」
赤とんぼが、すいすいと冷たい空気をきってゆきます。
「ええっと、それは、例えば冒険したりとか、お空を飛んだりとか、そういうことじゃあ、ないのかい?」
すると、クマの坊やは、もう一回、首をひねりました。
「そうだけど、ちょっと、違うなあ」
「じゃあ、どんなことなんだい?」
今度は、おじさんが首をひねる番でした。
「そうだなあ、あのね、ぞくぞくするっていうのはね……」
クマの坊やが、落ち葉を一枚、拾いながら言いました。
「とびきり特別じゃなくてもいいんだ。なにかちょびっとでも、素敵なことがあったり、楽しいことがあったりするときに、何だかおもわず、にっこりしちゃうようなことだよ」
クマの坊やの手の先で、真っ赤な葉っぱはお日さまの光を受け、さらさらとひかりました。
おじさんは、何か、最近、ちょびっとでも素敵なことはあったかしらと考えてみました。
ここでもやっぱり、うーん、うーんと言ってみましたが、昨日もおとといも、思い出せるのは、お店の中で一人、ずっとお話のことを考えていた、ということだけでした。

「おじさんも、きっと、こんな気分を知っているんじゃないかしら」
「うーん、思い出せないなあ」
「うーん、そうかあ」
今度は、クマの坊やまでうーん、うーんと言い出しました。
「どうしたら、おじさんも、ぞくぞくするっていうのがどんな気分か、分かるかなあ」
このまんまでは、クマの坊やまで、森のみんなに「うんうんぼうや」と呼ばれてしまうかもしれません。
すーい、すいと、トンボが二匹、おじさんと坊やの前を通り過ぎた所で、おじさんはやっとこさ言いました。
「そうだなあ、じゃあぼうや。ぼうやがぞくぞくするのは一体どういう時なのか、試しに、もっと詳しくおじさんに教えてみておくれ」
「もちろん、いいよ」
うーん、うんとうなるのをやめたクマの坊やは、腕組みをぱっとほどいて、真ん丸な目をうっとりと閉じました。
「ぼくがぞくぞくしちゃうのはね、例えば、赤とんぼを追いかけてるとき。どこまで行くのかわかんなくていいんだ。後ね、お使いの帰り道で、母さんに内緒で遠回りをする時。後はね……」
おじさんも、そっと目を閉じて坊やの話を聞いていました。それは、何だか新鮮で、でもちょっぴり懐かしいような感じがする話でした。
「どう？　おじさん。ぞくぞくするっていうのがどんなことか、分かった？」
「そうだねえ」

おじさんは、目を開けてすいとお空を見上げてみました。ぼうやも、おじさんのまねをして、上を見てみました。何もかも、すっと溶けてしまいそうな、気持ちの良い青空でした。

そういえば、最後にお空を見上げたのはいつだったかしらと、おじさんはぼんやり考えました。それから、お空は、こんなに綺麗なものだったかしら、とも考えました。そうして、久しぶりに見た今日のお空が、こんなにも透明なことが、少しうれしくなりました。

おじさんは、なるほど、とつぶやきました。

「うん。何だかちょっと、分かった気がするよ」

「本当に?」

クマの坊やは、嬉しそうに、身を乗り出して聞きました。

「そうだねえ、ひょっとしたら僕も、昔、ぞくぞくしたことが、あったのかもしれない」

すると、クマの坊やはにこりとして立ち上がりました。

「良かった! でもね、おじさん、ぼく、もっと良いこと思いついたんだ」

そして、そっとおじさんを持ち上げると、あっという間に大きなてのひらにのせて、ずんずんと歩き始めたのです。

おじさんは、ちょっと慌てて言いました。

「おやおや、一体全体、どこへ行くんだい?」

「どんぐり広場だよ!」

「でも、今、ちょうどお話の続きが書けそうになってきたばかりなんだ」

すると、クマの坊やはくすくすと笑いました。
「うんとぞくぞくするお話を作りたいなら、おじさんがうんとぞくぞくしてみなくちゃ」
そして、ぐんぐんと、風のように走り始めたのです。
「知らないものは、いくらお話し上手だって、きっと上手にお話しできないよ！　ちょっと分かっただけじゃだめだ！　ほらおじさん、目を開けてみてよ！」
最初は思わず、坊やの手にしがみついていたおじさんでしたが、坊やの言葉にそっと目を開けてみて、思わずにっこりしてしまいました。
「こりゃあまいった、こりゃあすごい！」
おじさんは、ひげをひくひくと動かし、大きな声をあげました。まるで自分がトンボになったみたいです。落ち葉の匂い、どんぐりの匂い、それからちょっと、雪の匂い。色々なにおいが、おじさんと坊やをごしごしと洗っては去っていくようでした。いつも見ている森は、びゅんびゅんと後ろに溶けてゆき、耳元ではぼおぼおと、風がうなっています。
心臓が、あふれんばかりに踊っているのが分かりました。
もちろん、あまりの高さと速さに、めまいがしなかったわけでもありませんが、そのふわふわとした感じが、かえって心地よく、おじさんは前を向いたまま、ほうとため息をつきました。
やがて、どんぐり広場につくと、クマの坊やは、広場の真ん中に、勢い良くごろんと横になりました。おじさんも、クマの坊やからぴょんと飛び降りると、近くの切り株の上によじ登って、横になりました。
「ああ、疲れた！」

大の字になっているおじさんと坊やに、かさかさと、赤、黄、橙（だいだい）、様々な葉っぱが降ってきます。
おじさんと坊やは、どちらからともなく、ふふふ、と笑い始めました。降ってくる葉っぱも、かさかさとしてなんだかくすぐったいですし、それに何だか、胸のあたりが、ふわふわ、くらくらとして、これまたくすぐったいのです。
やがて、その葉っぱがお布団ぐらいに降り積もったころに、おじさんが、むくりと起き上がりました。
「さてさて。ぼうや、そろそろ起き上れるかい」
ぼうやは、まだ少し、ふふふ、と笑いながらおじさんを見ました。
「ああ、楽しかった！　また、おじさんのお店まで、走って帰ろうよ」
おじさんも、楽しそうな坊やを見て、思わずふふふ、と笑いながら、首を振りました。
「その前に、ぞくぞくするっていうのが、一体どんなことなのか、教えてくれたお礼をしなくちゃ」
「お礼？」
坊やは、むくりと起き上がって言いました。
「そうさ。あいにく、あげられるような物は、何にも持ってこなかったんだけどね、でも、僕には、お話がある。良かったら、聞いていかないかい？」
おじさんがにっこりと笑ってそういうと、坊やは、わあい、と両手をあげて、それからその手を口まで持ってきて、小さな声でおじさんに聞きました。
「ぼく、とっても嬉しいんだけどね、どうせならね、森のみんなにも、おじさんの新しいお話を、聞いてもらいたいんだ。でも、どうかしら。久しぶりにみんなの前で話したら、おじさんは、緊張しちゃう？」

「いやいや！」
おじさんは、大きな声でそう言うと、自分の胸を、とんとたたいて見せました。
「大丈夫ですとも。何と言っても、おじさんは、森一番のおはなしやさんだからね」
クマの坊やは、それを聞いて嬉しそうにっこり笑うと、くるりと広場を見渡しました。
「さあさあみんな、おはなしやのおじさんの、楽しいお話が始まるよ！」
するとどうでしょう、木と木の隙間（すきま）、葉っぱの影、切り株の後ろから、森のみんながぴょんぴょんと、飛び出てきました。
「くまくんったら、おじさんとお話ししてたと思ったら、急に走り出しちゃうんだもの」
「おじさん、早く早く、新しいお話を聞かせてよ」
「うんうんおじさんが、おはなしやのおじさんにもどった！」
森のみんなは、口々にそんなことを言いながら、おじさんを囲んで、何だか嬉しそうです。
おじさんは、みんなの顔を見ながらもう一度、ふふふ、と笑って、大きな声を出しました。
「さあさあ、皆さん、おはなしやさんが来ましたよ。思わずぞくぞくするような、素敵なお話ありますよ。今日なら特別、どんぐりなしで、お話しましょう。さあさあ、さあさあ、早くおいで。どんぐり広場に、さあさあ、集まれ」
さあ、皆さんも、森に向かってそっと耳をすませてみてください。ネズミのおじさんの声が、聞こえてくるかもしれませんよ。

＊選考委員コメント＊

『おはなしや』

石野　晶……とても童話らしいお話しだと思いました。すっと染みこんでくるような文章と、擬音の使い方、表現の仕方も素敵です。お話を作れなくなってしまったネズミのおじさん。どうやったらお話しをまた作れるようになるのか。書き手としては身につまされる話で、引きこまれて読みました。解決策はほのぼのとしたものでしたが、もうひとひねりあるとよかったかもしれません。

牛崎　敏哉……「おはなしや」のねずみのおじさんは、胸をわくわくさせるお話を次々と創作するプロの仕事人。ところが、くまの坊やの前で作れなくなってしまう。ねずみとくまの間でかわされる「創作」談義は、それなりに文学の本質にせまっている。読み手側の「ぞくぞく体験」（繰り返しの文学）が抜け落ちているのが惜しい。

夏井　敬雄……ねずみのおじさんとクマの坊やとの「ぞくぞく談義」が交わされる晩秋の森の中が平易な言葉で見事に表現されています。雪の匂い、冷たい空気を切って飛ぶ赤とんぼ、さらさらと光る真っ赤な葉っぱ……そうした自然の美しさに包まれながら、クマの坊やはお話を作れなくなったおじさんに「ぞくぞく」するって、「思わず、にっこりしちゃうようなこと」だとアドバイスし、おじさんを手のひらにのせて風のように走ります。おじさんが新しいお話を作れるようになるのは当然だなと読者はすっかり納得させられてしまいます。

やえがしなおこ……「おはなしや」のねずみのおじさんが、お話を語れなくなった。「へいてんちゅう」のお店にクマの坊やがやってきて、「ワクワク」「ぞくぞく」の気持ちをおじさんに思い出させる。それは特別な冒険ではなく、日々の何気ない喜びや、森の美しさにあるとする点が秀逸。森の描写も生き生きとしていましたが、おじさんの売り物である「おはなし」の魅力が、もう少し伝わってくればと思いました。

銀賞

『花の夢』

花の夢

愛知県立時習館高等学校二年　空井　慧

昔から『なんだかいつもと違う』ことや『どこか違和感がある』ことに人より敏感だった。

だからか、夏休みに帰省した実家のマンションのエントランスの花瓶の一つに花が生けられていることにも、俺が誰より早く気付いたらしい。

花瓶だからそこに花があるのは当然と言えば当然なのだろうが、このマンションでは少し事情が違った。

というのも、花が好きで俺と話が合った前の管理人が去り、代わりにいかにも気が利かなそうな――前の管理人への思い入れからの思い込みかもしれないが――新しい管理人がやってきてからは、六つある花瓶たちはずっと空のまま、埃をためるだけの置物と化していたからだ。

花が生けられていると言っても、花屋でちゃんと買ってきて丁寧に生けられたようにも見えない。

そこらで適当に摘んできた花をぽいぽいと突っ込みました、というような風情である。そして花瓶を覗き込んでぎょっとした。

「なんで水すら入ってないんだ……」

もしや子供の悪戯だろうか。だとすると納得がいく。

水も与えられていないのだから、この花たちはすぐに萎れて枯れるだろう。いずれ誰かが気付いて捨てる、そ

れだけの話だと思って踵を返そうとして、立ち止まった。
「……ちょっとだけ、気が向いたから、それだけだから……」
誰にともなく言い訳をして、花瓶の花に手を伸ばす。バランスよく、美しく、より違和感のない場所へ、ふさわしい場所へ、花を挿し直していく。
勿論見るからに寄せ集めの適当な、言ってしまえばほとんど雑草の花々なので、そこまでいいものにはならない。ハサミもなく、茎を切って高さを変えることすらできなかった。
それでも、最初の酷い状態よりはましな見栄えになったのではないだろうか。
あとは水をやることが出来ればいいのだが、マンションの備品に勝手に水を入れてしまっていいものかと悩む。花だけならまあ、どこぞの悪戯小僧がやったものをちょっと気まぐれでいじっただけ、で済ませそうな気がするが、水までやってしまうといよいよ逃げ道がなくなる気がする。やめておこう。
今度こそ方向転換して、我が家に戻るべく足を踏み出す。それにしても柄にもないことをしてしまった。自分でも行動の理由がよくわからず首をひねる。
ただ、乱雑に花瓶に詰められた花々を見ていると、敗れた夢を思い出してしまいそうで辛かったことだけは確かだった。
――などと考え事をしていたからか、エレベーターから降りてきた子供とぶつかってしまった。
「あ、ごめんなさい!」
「いや、こちらこそ」
ごめん、と言いかけたところで、その少年の手元に目が釘付けになる。

小学校低学年くらいのその子は、誰もが見たことがあるであろう象のジョウロを抱えていた。なみなみと入った水がたぷんとゆれるのが視界に入り、もしやと思って口を開く。
「あの花瓶……」
と言いさすと、少年はみるみると顔を固くし、その先も聞かず無言で走り去った。どうやら当たりらしい。
少し悩んでから後を追ってみると、案の定一直線に先程の花瓶に向かっていた。
そして立ち止まり、自分が突っ込んだ時と明らかに変わった花の配置に気付いて困惑している風である。
何かを警戒しているようにきょろきょろ辺りを見回し、――そのくせしっかりその動きを見ている俺にはまるで気付かないで――花の生けられた花瓶にそろそろと水を注いだ。
「ねえ」
声をかけると、少年はビクッと飛び上がりぎこちなくこちらを見た。その顔にはありありと怯えが浮かんでいる。叱られるのを怖がるくらいならやらなければいいのにと思いながらも、それ以上怯えさせないようにゆっくりと近寄ってみる。
「いやあの、別に怒ってるんじゃなくて。なんでお花を入れたのかなって」
様子を見る限りただの悪戯とも思えなかったのでそう言うと、少年は真一文字に引き結んでいた口を開いた。
「おにいちゃんが、お花、かえたの……？」
「あ、うん、ごめんね。勝手なことして」
何故こちらが謝っているのかとも思いつつ、出来る限り優しい声を心がけて応答する。どちらかと言えば子供は苦手な方だ。好奇心にかられて話しかけたことを既に後悔し始めている。

少年は花瓶をちらちらと仰ぎ見ながらなにやら逡巡していた。
「あの……えと、とっても、きれい」
ようやく開いた小さな口から漏れた言葉が生花への感想だと理解するのに少し時間がかかった。ぽかんと口を開けてしまった俺に向けて、少年はぽつぽつと言葉を紡ぐ。
「おかあさんがもうすぐ、病院からかえってくるの……おかあさん、お花がすきだから」
玄関を飾って母親を迎えたかったが家には花瓶がなく、そこでエントランスの花瓶の存在を思い出した、ということらしい。
少年は体を揺らして足元を見つめていたが、ふいにこちらを見上げて言った。
「あの、ぼくがつんできたお花を、ほかのかびんにも、同じようにかざってくれませんか」
「え」
「だめ、ですか？」
この花瓶は使われていないとはいえマンションの備品で、勝手に使ってしまっていいものとは思えない。
この頼みは断って、子供を諭し、花をここに飾るのは諦めさせるべきだと思う。だがそう思いつつも、花を美しく整えること、それで人の依頼に応えること、人を喜ばせること――そういったことへの渇望が、置き捨てたはずの夢が体を縛る。気付くと、口が勝手に動いていた。
「……俺で、よければ」
こうして俺は、少年とともに花を生け始めた。
タカハタコウです、と少年は名乗った。

コウが近所の道端や河原から花や葉を摘んでくる。俺はそれを切ったりして整え、花瓶に配置する。物足りなければこんな花が有ると良い、とコウに伝える。満足いく出来になったら次の花瓶に取り掛かる。

聞けば、母親が帰ってくるのは二日後だと言う。母親のことを語るコウは頬を上気させていて、その深い親愛がよくわかり微笑ましかった。

そういえば、俺も初めて作った花束は母さんに向けたものだったっけ、とふと思う。母が驚き喜んでくれたのが嬉しくて、丁度コウと同じくらいの年頃だった俺はお花屋さんになりたいと無邪気に思ったものだった。

確か、花屋は女の子がなるものだと同級生にからかわれ、傷ついて諦めたのだったと思う。それからしばらく経って、今度はフラワーアーティストになりたいと言い出したのだからなんとも根深い。そちらの夢はまだ最近のもので、まだ生々しい未練が残っているから、あまり考えたくはない。

「おにいちゃん、お花、つんできたよ。オレンジのやつ」

「ああ、ありがとう」

コウはよく働いた。こんな花が欲しい、と言うとなかなかイメージに合った花を持って来るので、センスの良さも窺えた。

花を生けながら、コウと様々な話をする。

母親は花が好きだが父親はそうでもなく、更に両親ともに忙しく世話ができないことから家には花を置いていないということ。花束を買いたいと思ったが、コウのお小遣いでは厳しかったということ。病院に行くまでの道で花を摘んで持っていくと母親がとても喜んでくれたということ。

当然ながら人が通るエントランスで花瓶を抱えて堂々と生けるわけにもいかないので、マンションの裏手であ

る程度花の配置を整えてから花瓶に差し込んでいる。そして、差し込んでからは素知らぬ顔でいる。正直いつ見咎められるかわかったものではないし、なんの前触れもなく花が捨てられていてもおかしくない。幸いと言うべきか、今はまだそんな事態にはなっていない。

たとえそうなっても悪いのは全面的にこちらなのでどうしようもないが、怒られるかもしれないと思いつつも生けるのはやめられなかった。久々に花をいじれてとても楽しかったし、コウとコウの母親を喜ばせてやりたいという気分にもなってきていた。

三本の花瓶が埋まった夕方、俺はなんとなく充実した気分でコウと別れた。

「あんた、コンビニ行くって出たっきり帰ってこんかったけど何してたの」

夕飯の席で母に言われ、ぎくっとする。まさかマンションの花瓶を勝手に使って生け花してました、とも言えず「近所の子供に懐かれて、遊んでた」

と答えた。そこまでの嘘にもなっていないはずだ。母はただ、ふーんとだけ言って後はもう興味もなさそうにしている。

「大学卒業した後どうしたいかは決まったの？」

「あー、まあ、適当に就職する感じで……」

「フラワーなんたらはどうしたの」

「それは……いいんだよ、もう」

デリカシーもなく尋ねてくる母に多少うんざりしつつも、答えないわけにもいかないのでおざなりに返事をする。

自分にそこまでの才能はないのだと気付いて夢を諦めた時の、胸を締め付けるような感傷がよみがえる。
残りの食事は喉を通らなかった。
「おにいちゃん、おはよう!」
翌朝俺がエントランスに降りると、コウは既に花を抱えて待っていた。満面の笑みで、明日母親が帰ってくることへの喜びが伝わってくる。
「うん、おはよう」
早速花を何本か取って生け方を考えていると、背後から声がした。
「君たちですか? 勝手に花瓶を使っているのは」
はっとして振り返ると、そこには渋い顔をした管理人が立っていた。
「あ、えっと……」
冷や汗を垂らしながらコウの方を見ると、顔を青くしている。
「ご、ごめん、なさい……」
俯いて声を発したコウを見て、慌てて頭を下げる。子供のコウはまだしも、大学生にもなってこんなことをした俺にはまず間違いなくお咎めがあるだろう。
コウは所在無げな顔をしながらも、必死に言葉を重ねている。
「あの、明日、おかあさんが帰って来るから……お花を、かざりたかったんです。おにいちゃんは、ぼくにたのまれただけで、だから」
自分も不安だろうにこちらをかばってくれるコウに目を見開く。なんて出来た子供だろう。

「いや、俺も悪かったし……」
「わかりました」
黙ってコウの言葉に耳を傾けていた管理人は俺のセリフを遮った。次にその口から出てくるのはお叱りだろう、と身構えると、予想外の言葉が飛んできた。
「そういう事情があるなら、ちゃんと相談しなさい」
驚いて見返すと、管理人はいつもの仏頂面とは少し違う表情を浮かべている。微笑んでいるのだ。
「まあ、あるのに使わないのもなんですからね……好きにしなさい」
「え……いいんですか？」
管理人は微笑んだまま頷く。
コウと顔を見合わせると、コウは幼い顔にじわじわと朱をのぼらせた。俺も多分、笑っている。
「ありがとうございます！」
神経質そうだとばかり思っていた管理人は思いの外優しかった。
管理人に許可を貰って今度はエントランスで作業をしていると、人に声をかけられるようになった。
「まあ、綺麗ねえ。上手だこと」
「ありがとうございます」
久しぶりの褒め言葉がくすぐったくも嬉しい。さらに、花屋から花束を買ってきてあげようかと言ってくれる人まで現れた。しかしコウは
「ありがとう、ございます。でも、いいの。おにいちゃんがきれいにしてくれたお花が一番、きれいなんです」

と言って笑った。それを聞いて、なんだか胸が温かくなった。
正午を越える時間になって、六つの花瓶は全て埋まった。コウがぺこりと頭を下げる。
「ほんとうに、ありがとうございました。おかあさん、きっと、よろこんでくれると思います」
コウは華やかに彩られたエントランスを見回して幸せそうに笑っていたが、ふと顔を小さく歪めた。どうしたのかと思っていると、ぽつりと声を漏らした。
「おにいちゃん、これからも、会える?」
「ああ、お盆休みが終わるまではここにいるけど……」
「おぼん休みが、おわったら?」
当然大学通学のための下宿先に戻る。またこちらに来るのは、早くても冬休みだろう。
そう言うと、コウは一瞬寂しそうな顔をしてから、なにやら決心したような顔でこちらを見上げてきた。
「じゃあ、ぼく、おにいちゃんがいない間に、お花をいけるれんしゅうをしてます。冬までにきっと上手になるから、また会うときに見て、もっと上手になるように、おしえてね」
思ってもいなかったことを言われて驚いたが、同時に嬉しくなった。一番の笑顔を浮かべて答える。
「俺で、よければ」
コウの母親は、線の細い優しそうな人だった。エントランスに溢れる花を見て「まあ」と声を上げ、嬉しそうにコウの頭をなでていた。
「ありがとうございます、本当に綺麗……でも、ご迷惑ではなかったですか?」
コウに腕を引かれてこちらにやってくると、柔らかい声で礼を言ってくれる。

「いえ、そんな。俺も楽しかったですし」
本心から答えると、コウの母親はコウを愛おしそうに眺めながら微笑んだ。
「そうでしたら良かったです……プロ志望でいらっしゃったりするんですか？」
その言葉に胸を突かれる。何と答えるべきか迷っていると、コウが明るい声を上げた。
「きっとそうだよ。ぼくもおにいちゃんみたく、お花をきれいにするひとになりたいの」
無邪気に憧れてくれるコウに胸が熱くなって、つい答える。
「……はい、フラワーアーティストになりたいな、と」
勢いで言ってしまってからふと、夢を追い直してみるのもいいかもしれない、と思った。そして腕を磨き、コウの憧れの存在であり続けるのだ。
花瓶で輝く花々がこちらに笑いかけているような気がした。

＊選考委員コメント＊

『花の夢』

石野　晶……マンションのエントランスの花瓶に、花が生けてある。その日常の光景から様々なドラマが展開されていきます。母親を喜ばせたい少年の思い。花を生けることで人を喜ばせ、諦めた夢と向き合う主人公。一つだけ残念なのが童話という枠組みでは、評価しにくい作品だったということです。主人公の年齢を下げるだけでも、印象が変わったかもしれません。

牛崎　敏哉……フラワーアーティストを目指す大学生の「俺」と、退院してくる母のためにマンションの入り口エントランスに花を飾ろうとする小学校低学年のコウの物語。野に咲く花をきれいに飾ろうという二人の心の変化が見事に描かれ、ほっこりする。作品全体が大人（大学生）目線であるところで評価が分かれた。

夏井　敬雄……夢を諦めかけた大学生と退院する母を待つ小学生との出会いを描いた物語。空想や幻想で惹きつける作品とは異なる不思議な味わいを感じました。大学生が出会う小学生は母親を深く愛する普通の小学生でありながら、読者にはどこかしら、大学生に幸福を届けるために出現した座敷わらしのような趣があります。作品のどこにも不思議な現象は描かれていませんが、日常生活にふと起こり得る奇跡のようなきっかけや人との出会いを印象づけるミステリアスな物語の展開に感心しました。

やえがしなおこ……花が好きで、フラワーアーティストの道に進みたいと思いつつ、一歩踏み出せないでいる大学生。退院してくる母親のために花を飾りたいという小学生との交流を通じて決意を固めていく。さりげない日常と、主人公の心の動きが自然に描かれていて、文章も巧みです。ジャンルとしては小説に近いと思われた点が残念ですが、心温まる物語でした。

受賞作品

銅賞　作品一覧

☆「ひとりぼっちの役者」
緒　方　　翠　東京都　駒沢学園女子高等学校３年

☆「ことばの矢」
舩　津　薫　子　東京都　創価高等学校２年

☆「生ゴミの大脱走」
千　葉　玲　美　東京都　中央大学附属高等学校２年

☆「桜色のワンピース」
降　矢　梨々花　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年

☆「飛べないハヤブサ」
伊　東　咲　春　愛知県　県立時習館高等学校２年

☆「私の音楽の先生」
佐　藤　杏　耶　愛知県　藤ノ花女子高等学校３年

☆「夢見たあの世界」
国　村　ひなた　熊本県　県立玉名工業高等学校２年

☆「カラスのいえ」
福　島　嘉津穂　鹿児島県　県立川内高等学校２年

【学校賞】
日本女子大学附属高等学校（神奈川）

【奨励賞】
時習館高等学校（愛知）

ノミネート記念作品一覧

☆「また、白銀の頃に」
多　田　帆　香　岩手県　県立花巻南高等学校１年
☆「サーカスがくれた勇気」
安　住　ひかる　宮城県　宮城学院高等学校２年
☆「決意を力に」
阿久津　瑞　希　栃木県　TBC 高等専修学校３年
☆「アマガエルとヒキガエル」
曽　篠　珠　伶　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校２年
☆「大樹のミルク」
石　丸　結　菜　千葉県　県立清水高等学校２年
☆「ないものねだりのクラゲたち」
加　藤　清　葉　東京都　江戸川女子高等学校２年
☆「夢売りのほうき星」
川　﨑　日　瑚　東京都　東京家政大学附属女子高等学校３年
☆「バターに溶けるビターな思い出」
吉　川　文　菜　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆「モノクロの不思議な冒険」
杉　野　　碧　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆「少年と老人」
青　野　有　佳　石川県　金沢大学附属高等学校２年
☆「放課後の掃除」
川　上　耀　誉　愛知県　藤ノ花女子高等学校２年
☆「止まない雨」
大　石　結　香　愛知県　藤ノ花女子高等学校３年
☆「僕と魔法のスケッチブック」
山　田　果　歩　京都府　同志社女子高等学校３年
☆「ぼくの手」
松　本　麻　由　京都府　同志社女子高等学校３年
☆「四本腕のブライト」
山　村　莉　世　京都府　同志社女子高等学校３年
☆「テオの夢」
山　口　彩　葉　兵庫県　県立加古川東高等学校２年
☆「死神とエラ」
湊　　むつみ　奈良県　県立郡山高等学校２年
☆「壊れた時計のその先は」
吉　本　有　那　広島県　県立安西高等学校３年
☆「君だけの人生」
橋　本　京　華　山口県　県立防府商工高等学校２年
☆「森で一番星がきれいな場所」
神　田　　怜　長崎県　県立長崎西高等学校２年
☆「ちりん～風鈴の約束～」
野　邊　咲也子　宮崎県　宮崎第一高等学校１年

第1回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「干潟（ひがた）の夜に」
　　方　丈　真菜美　千葉県　県立千葉高等学校３年
☆銀の星賞　「ミドリノコエ」
　　池　宮　奈々子　沖縄県　県立那覇西高等学校２年
☆銀の星賞　「ちびときつねとおばあちゃんと」
　　昆　　ちひろ　岩手県　県立不来方高等学校３年
☆銀の星賞　「水音（すいね）の虹」
　　山　崎　美　穂　東京都　豊岡女子学園高等学校１年
☆銅　賞　「お日さまと白い花」
　　阿　部　暁　子　岩手県　県立花巻北高等学校１年
☆銅　賞　「お茶とオニギリ」
　　佐　藤　香　織　群馬県　県立高崎商業高等学校２年
☆銅　賞　「音の子ララ」
　　波　場　友美子　神奈川県　鎌倉女学院高等学校１年
☆銅　賞　「その心、忘れないでください」
　　生　瀬　千紗子　神奈川県　鎌倉女学院高等学校１年
☆銅　賞　「夜」
　　伊　藤　香　奈　岐阜県　県立各務原西高等学校３年
☆銅　賞　「お星様をさがしに」
　　加　藤　直　樹　愛知県　南山高等学校３年
☆銅　賞　「伝　統」
　　五百森　裕　子　香川県　県立飯山高等学校３年
☆銅　賞　「お空にのぼったクモ」
　　坂　中　　彩　長崎県　向陽高等学校３年

第2回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「夢の羽～僕たちの約束～」
　　藤　原　歓　子　岡山県　県立津山高等学校３年
☆銀の星賞　「夏色の奇跡」
　　岡　部　綾　子　東京都　都立戸山高等学校２年
☆銀の星賞　「真夜中の冒険」
　　平　沢　美　佳　茨城県　県立水戸第三高等学校２年
☆銀の星賞　「ノラ爺のきらきらぼし」
　　橘　　加奈子　岩手県　県立盛岡第二高等学校３年
☆銅　賞　「からっぽの郵便箱」
　　吉　田　千　明　北海道　旭川藤女子高等学校３年
☆銅　賞　「ねずみの勇気」
　　小　野　雅　子　山形県　県立新庄南高等学校３年
☆銅　賞　「月の下の晩餐会」
　　菊　池　優　香　千葉県　県立松戸高等学校３年
☆銅　賞　「座敷わらし」
　　志　村　美　保　東京都　京華商業高等学校３年
☆銅　賞　「陽のあたる丘」
　　金　行　めぐみ　東京都　白百合学園高等学校２年
☆銅　賞　「コスモスのうた」
　　森　田　佳代子　富山県　県立井波高等学校３年
☆銅　賞　「ナツの思い出」
　　伊　賀　みなみ　兵庫県　小林聖心女子高等学校２年
☆銅　賞　「旅人」
　　池　村　怜　也　沖縄県　県立宮古農林高等学校３年

第3回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「Comfortable Doll」
　　山　本　晴　佳　栃木県　作新学院高等学校１年
☆銀の星賞　「ないしょないしょの星祭り」
　　島　貫　春　菜　山形県　県立山形西高等学校１年
☆銀の星賞　「ジイチャンは僕のヒーローで」
　　小　林　奈々絵　北海道　根室高等学校１年
☆銀の星賞　「月の夜」
　　菅　野　澄　子　東京都　恵泉女子学園高等学校３年
☆銅　賞　「おみつ」
　　冨　樫　雅　章　山形県　県立置賜農業高等学校３年
☆銅　賞　「おばけ屋敷で見たものは」
　　木　本　奈　緒　茨城県　県立土浦第二高等学校１年
☆銅　賞　「風の唄」
　　小　川　　萌　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校１年
☆銅　賞　「夏の約束」
　　服　部　真　季　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校２年
☆銅　賞　「てのひらのそら」
　　神　崎　由依子　東京都　慶応義塾女子高等学校２年
☆銅　賞　「夜空に浮かぶデュランタ」
　　峠　田　彩　香　愛知県　県立時習館高等学校１年
☆銅　賞　「たからもの」
　　小　林　千　津　京都府　同志社女子高等学校３年
☆銅　賞　「存在のあり方」
　　高　畑　明　弘　香川県　尽誠学園高等学校２年

第4回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「カラーメーター」
　　岡　安　茉莉花　埼玉県　栄東高等学校２年
☆銀の星賞　「ネコシャンプーのぼうけん」
　　矢　吹　優　衣　福島県　県立光南高等学校２年
☆銀の星賞　「life times」
　　山　本　晴　佳　栃木県　作新学院高等学校２年
☆銀の星賞　「RESET」
　　土　屋　絵　美　東京都　白百合学園高等学校１年
☆銅　賞　「空色スケッチ」
　　石　川　　朋　岩手県　県立水沢高等学校２年
☆銅　賞　「サマー・セブン・デイズ」
　　岡　野　真　理　茨城県　県立竜ヶ崎第一高等学校２年
☆銅　賞　「青いカバ」
　　菅　　和　也　東京都　早稲田大学高等学院３年
☆銅　賞　「フィーデルの旅」
　　谷　田　雄　一　東京都　早稲田大学高等学院３年
☆銅　賞　「しわとりばあさん」
　　森　脇　　梓　京都府　府立北桑田高等学校１年
☆銅　賞　「二人の世界～空に流れる歌～」
　　中　山　真　依　兵庫県　神戸海星女子学院高等学校２年
☆銅　賞　「Wish」
　　瀬良垣　　香　沖縄県　県立具志川高等学校２年

第5回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「かっぱのはなし」
　　矢　吹　優　衣　福島県　県立光南高等学校３年
☆銀の星賞　「お化け踏切と不思議な窓」
　　三　宮　海　里　北海道　立命館慶祥高等学校３年
☆銀の星賞　「惑星観覧車」
　　大　野　真　季　栃木県　県立氏家高等学校３年
☆銀の星賞　「家族になろう」
　　山　本　晴　佳　栃木県　作新学院高等学校３年
☆銅　賞　「夏休み　ヒカリのオト」
　　工　藤　千　明　岩手県　県立盛岡商業高等学校２年
☆銅　賞　「歌、満ちる夜」
　　島　貫　春　菜　山形県　県立山形西高等学校３年
☆銅　賞　「ビー玉にうつるココロ」
　　岡　野　真　理　茨城県　県立竜ヶ崎第一高等学校３年
☆銅　賞　「透明人間」
　　畑　野　舞　子　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校２年
☆銅　賞　「ミリのそばにいるよ」
　　森　　仁　美　徳島県　県立城南高等学校３年
☆銅　賞　「双子の肖像」
　　筒　井　陽　香　山口県　梅光女学院高等学校３年
☆銅　賞　「Hg ～水銀の魅力～」
　　荒　瀬　菜穂子　福岡県　県立小倉商業高等学校２年
☆銅　賞　「約束の旅」
　　松　本　貴　子　沖縄県　県立嘉手納高等学校３年

第6回　受　賞　作　品

☆銀の星賞　「かっぱのかあちゃん」
　　市　川　　愛　東京都　白百合学園高等学校２年
☆銀の星賞　「思い出の思い出は風の庭」
　　黒　田　佳　奈　香川県　県立三木高等学校２年
☆銀の星賞　「憎しみのカラス」
　　横　田　仁　美　山口県　県立防府高等学校３年
☆銀の星賞　「夕焼けの精」
　　河　原　奈　里　熊本県　県立熊本高等学校２年
☆銅　賞　「森話（しんわ）」
　　阿　部　美智子　岩手県　県立盛岡第二高等学校１年
☆銅　賞　「おじいさんの棺」
　　伊　藤　早　紀　埼玉県　県立大宮武蔵野高等学校２年
☆銅　賞　「虹色の枠の窓」
　　柴　原　由　季　千葉県　県立柏南高等学校１年
☆銅　賞　「僕が強くなれる日は、」
　　井　上　澄　香　東京都　都立富士高等学校１年
☆銅　賞　「黒板ビリー」
　　河　合　礼　子　神奈川県　市立横浜商業高等学校２年
☆銅　賞　「風送る」
　　若　槻　理　恵　島根県　県立横田高等学校３年
☆銅　賞　「悲しいアクマ」
　　古　賀　ちひろ　福岡県　中村学園女子高等学校３年

第7回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「鏡に映る夢」
　　武　田　啓　太　山形県　県立新庄南高等学校２年
☆銀の星賞　「ミコの大切な大切なものは」
　　石　澤　咲　希　岩手県　県立福岡高等学校３年
☆銀の星賞　「僕と狐」
　　北　山　萌　夏　東京都　文化女子大学附属杉並高等学校１年
☆銀の星賞　「くすの木のうた」
　　柳　原　茉美佳　大阪府　大阪教育大学附属高等学校２年
☆銅　賞　「空の旋律」
　　中　島　菜　月　群馬県　東京農業大学第二高等学校２年
☆銅　賞　「子守桜」
　　清　水　真　裕　埼玉県　県立伊奈学園総合高等学校３年
☆銅　賞　「星の降る夜」
　　山　口　祥　子　石川県　県立大聖寺高等学校２年
☆銅　賞　「文字の旅」
　　田　村　　栞　愛知県　滝高等学校２年
☆銅　賞　「毎週月・金は星の日です」
　　高　山　愛　美　岐阜県　県立加茂高等学校３年
☆銅　賞　「いらない記憶の回収屋」
　　小　屋　果　歩　兵庫県　小林聖心女子学院高等学校１年
☆銅　賞　「Love in Snow」
　　根　宜　めぐみ　島根県　県立太田高等学校２年

第8回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「昨日オバケ」
　　石　田　祐　也　群馬県　県立桐生高等学校２年
☆銀の星賞　「あめふるとき」
　　葛　生　明日香　千葉県　東京学館高等学校１年
☆銀の星賞　「当たり前のこと」
　　石　川　茉　耶　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校１年
☆銀の星賞　「上弦の海」
　　上　岡　沙　都　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆銅　賞　「桜の舞う頃に」
　　小　林　明日香　埼玉県　秋草学園高等学校３年
☆銅　賞　「空を見上げて」
　　川　上　小百合　千葉県　千葉国際高等学校１年
☆銅　賞　「いちにち　いちにち…」
　　吉　岡　佑里恵　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校２年
☆銅　賞　「名のない喫茶店」
　　吉　井　加　奈　神奈川県　カリタス女子高等学校１年
☆銅　賞　「贈り物」
　　長谷川　礼　奈　神奈川県　日本女子大学附属高等学校１年
☆銅　賞　「天体観測～星になった少年～」
　　豊　原　彩　香　福岡県　県立筑紫丘高等学校２年
☆銅　賞　「ノノ」
　　吉　井　史　歩　鹿児島県　県立鶴丸高等学校３年

第9回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「うそつきねこムクリ」
　　吉　澤　仁衣那　群馬県　県立高崎東高等学校３年
☆銀の星賞　「うそつきと魂管理人」
　　藤　本　美紗子　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校２年
☆銀の星賞　「トンボ池」
　　田　口　健　司　東京都　創価高等学校３年
☆銀の星賞　「SHEEP SLEEP」
　　長谷川　礼　奈　神奈川県　日本女子大学附属高等学校２年
☆銅　賞　「きいろの国」
　　工　藤　舞　子　青森県　県立弘前中央高等学校３年
☆銅　賞　「夏跡」
　　増　田　恵　美　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校１年
☆銅　賞　「赤鬼と正月」
　　北　田　ゆ　ず　東京都　白百合学園高等学校２年
☆銅　賞　「コトバの国」
　　茂　木　まどか　山梨県　北杜市立甲陵高等学校１年
☆銅　賞　「博士の愛したロボット」
　　八　箇　裕　子　富山県　県立大門高等学校１年
☆銅　賞　「怪獣事件簿がくれたもの」
　　遠　山　奈津子　岐阜県　県立恵那農業高等学校３年
☆銅　賞　「仔猫の唄」
　　水　船　愛英理　京都府　京都女子高等学校２年

第10回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「机の中は空」
　　内　田　彩　香　埼玉県　本庄第－高等学校２年
☆銀の星賞　「霧川の童」
　　高　田　有優美　山形県　県立山形西高等学校２年
☆銀の星賞　「シルベル」
　　古　関　友梨香　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆銀の星賞　「アルクの大冒険」
　　坪　井　みづき　京都府　府立京都すばる高等学校３年
☆銅　賞　「クウの手紙交換」
　　川　上　雅　子　宮城県　秀光中等教育学校１年
☆銅　賞　「またたき」
　　水　野　秀成子　東京都　桐朋女子高等学校１年
☆銅　賞　「ぼくたちのなつやすみ」
　　品　田　茉梨絵　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆銅　賞　「空色は恋」
　　西　山　　萌　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆銅　賞　「もう一人の俺」
　　溝　口　達　康　京都府　府立京都すばる高等学校３年
☆銅　賞　「夢の中の大図書館」
　　金　川　絵梨花　兵庫県　武庫川女子大学附属高等学校３年
☆銅　賞　「ビー玉水溶液」
　　佐々木　　和　福岡県　県立筑紫丘高等学校２年

第11回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「うちゅう人からのてがみ」
　　番　場　絵　里　茨城県　茨城高等学校３年
☆銀の星賞　「どうして」
　　川　上　雅　子　宮城県　秀光中等教育学校２年
☆銀の星賞　「おばあちゃんのドライヤー」
　　上　田　侑　乃　埼玉県　浦和第一女子高等学校１年
☆銀の星賞　「陽炎少年」
　　水　田　佳　奈　京都府　同志社女子高等学校３年
☆銅　賞　「涙の栓」
　　長谷川　愛　瑠　青森県　県立五所川原高等学校１年
☆銅　賞　「恋色ラムネ」
　　中　野　沙　紀　岩手県　県立花北青雲高等学校２年
☆銅　賞　「露玉花語」
　　高　田　有優美　山形県　県立山形西高等学校３年
☆銅　賞　「見沼のやくそく」
　　松　藤　美瑳子　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校２年
☆銅　賞　「ひとりぼっちの王様」
　　石　坂　　梓　東京都　東京女子学園高等学校１年
☆銅　賞　「心の中の星空へ」
　　北　澤　友里恵　東京都　お茶の水女子大学附属高等学校１年
☆銅　賞　「先生」
　　島　田　　瑛　京都府　同志社女子高等学校３年

第12回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「金色のカメ」
　　上　田　侑　乃　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校２年
☆銀の星賞　「にこにこ」
　　長谷川　愛　瑠　青森県　県立五所川原高等学校２年
☆銀の星賞　「はじめの一歩」
　　関　　菜々美　東京都　白百合学園高等学校２年
☆銀の星賞　「かけごえは「泣き虫ヒーロー！」」
　　吉　岡　明日香　神奈川県　横浜共立学園高等学校２年
☆銅　賞　「夏の終わり」
　　清水畑　　央　岩手県　県立平舘高等学校３年
☆銅　賞　「お姉ちゃんになった日」
　　小田島　夕　花　岩手県　県立花巻北高等学校１年
☆銅　賞　「お兄ちゃんに会いに」
　　似　内　萌　花　岩手県　県立花巻北高等学校１年
☆銅　賞　「サンの森」
　　川　上　雅　子　宮城県　秀光中等教育学校３年
☆銅　賞　「カッパの川流れ」
　　村　上　佳代子　宮城県　常盤木学園高等学校２年
☆銅　賞　「人形語り」
　　坂　井　遥　香　福岡県　県立筑紫丘高等学校２年
☆銅　賞　「月の花通りのかばん屋さん」
　　濱　田　　鈴　鹿児島県　県立大島高等学校１年

第13回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「シンフォニー」
　　原　尾　勇　貴　神奈川県　公文国際学園高等部１年
☆銀の星賞　「鬼の子トキ」
　　上　田　侑　乃　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校３年
☆銀の星賞　「アイーシャと奇跡の種」
　　大　場　あすみ　千葉県　麗澤高等学校３年
☆銀の星賞　「春の野のアレックス」
　　千　石　芙紀子　神奈川県　横浜雙葉高等学校２年
☆銅　賞　「星にねがいを」
　　小田島　夕　花　岩手県　県立花巻北高等学校２年
☆銅　賞　「茜色の空」
　　小長井　素　賢　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校１年
☆銅　賞　「優しさのカタチ」
　　関　　菜々美　東京都　白百合学園高等学校３年
☆銅　賞　「寛太日記」
　　藪　田　薫　理　東京都　白百合学園高等学校２年
☆銅　賞　「特急蜻蛉――機三郎の手記より」
　　三　橋　克　馬　神奈川県　県立津久井浜高等学校３年
☆銅　賞　「そして僕等は動きだす」
　　蓼　沼　理　紗　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆銅　賞　「夏の桜」
　　田　畑　奈　緒　鹿児島県　鹿児島純心女子高等学校１年

第14回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「うまれる」
　　小田島　夕　花　岩手県　県立花巻北高等学校３年
☆銀の星賞　「蝉と花火」
　　山　寺　杏　奈　千葉県　西武台千葉高等学校１年
☆銀の星賞　「金色の思い出－座敷わらしに会った秋－」
　　吉　武　英　莉　東京都　白百合学園高等学校３年
☆銀の星賞　「僕を変えた夏休み」
　　歌　津　ま　い　京都府　府立北嵯峨高等学校３年
☆銅　賞　「木の山田さん」
　　柴　田　宏　大　北海道　小樽潮陵高等学校３年
☆銅　賞　「深森奇譚」
　　松　村　美　里　東京都　鴎友学園女子高等学校１年
☆銅　賞　「逃げないで、心」
　　戸　塚　紀　名　東京都　白百合学園高等学校１年
☆銅　賞　「五年Ｄ組　深海クラス」
　　原　尾　勇　貴　神奈川県　公文国際学園高等部１年
☆銅　賞　「鈴の音と天狗の山」
　　千　石　芙紀子　神奈川県　横浜雙葉高等学校３年
☆銅　賞　「夏の終わり」
　　瓜　田　実　可　静岡県　県立清水南高等学校１年
☆銅　賞　「ねずみのお化粧屋」
　　堀　井　柚　月　愛知県　県立西尾高等学校１年

第15回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「めづ様」
　　佐　藤　礼　菜　岩手県　県立水沢高等学校２年
☆銀の星賞　「アイアン」
　　原　尾　勇　貴　神奈川県　公文国際学園高等部３年
☆銀の星賞　「「いし」のライオン」
　　迫　田　知　樹　大阪府　府立岸和田高等学校３年
☆銀の星賞　「冬馬とカンタ」
　　田　中　春　日　兵庫県　県立洲本高等学校３年
☆銅　賞　「恥ずかしがり屋の特効薬」
　　齋　藤　秀　仁　群馬県　県立高崎東高等学校２年
☆銅　賞　「三人の子供」
　　德　永　志　帆　東京都　大妻多摩高等学校２年
☆銅　賞　「古本屋」
　　福　嶋　一　菜　神奈川県　県立鎌倉高等学校１年
☆銅　賞　「お日様フルーツ」
　　岩　佐　菜々子　福井県　県立藤島高等学校１年
☆銅　賞　「アルフレッドと鏡」
　　宮　澤　かれん　静岡県　県立御殿場南高等学校２年
☆銅　賞　「信じる強さ」
　　森　内　千　裕　大阪府　府立農芸高等学校１年
☆銅　賞　「キツネが鳴く時」
　　田　畑　奈　緒　鹿児島県　鹿児島純心女子高等学校３年

第16回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「弱虫鬼ごっこ」
　　佐　藤　綾　香　岩手県　県立水沢高等学校３年
☆銀の星賞　「影隠し」
　　佐　藤　礼　菜　岩手県　県立水沢高等学校３年
☆銀の星賞　「ひとりで電車に乗った日」
　　内　田　夏　鈴　東京都　立教女学院高等学校３年
☆銀の星賞　「本の虫」
　　小　山　夏　子　神奈川県　カリタス女子中学高等学校１年
☆銅　賞　「雪とうそつき」
　　小　河　碧　峰　群馬県　県立前橋女子高等学校１年
☆銅　賞　「たまきのたましい」
　　菊　地　結　衣　埼玉県　県立浦和第一女子高等学校１年
☆銅　賞　「かしの木の山」
　　木　村　かのん　東京都　聖心女子学院高等科３年
☆銅　賞　「形或るもの」
　　羽　鳥　友　稀　静岡県　県立沼津東高等学校２年
☆銅　賞　「とべない僕ら」
　　朱　宮　奈々葉　愛知県　県立一宮南高等学校１年
☆銅　賞　「水色の秘密基地」
　　中　村　燎　平　福岡県　県立筑紫丘高等学校２年
☆銅　賞　「あぶらあげ」
　　泉　　侑　紀　熊本県　有明高等学校２年

第17回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「知恵の神さま」
　　髙　橋　璃　来　北海道　標茶高等学校３年
☆銀の星賞　「二人のおじいちゃん」
　　肥　沼　由里子　埼玉県　浦和第一女子高等学校２年
☆銀の星賞　「猿の子」
　　加　藤　言　美　東京都　香蘭女学校高等科１年
☆銀の星賞　「あたりめと金平糖」
　　小　山　夏　子　神奈川県　カリタス女子高等学校２年
☆銅　賞　「線香花火が消えるまで」
　　友　清　佳　南　東京都　瀧野川女子学園高等学校２年
☆銅　賞　「僕はアイスクリーム王子」
　　姫　野　友梨香　山梨県　駿台甲府高等学校２年
☆銅　賞　「追憶」
　　長　倉　佑　夏　静岡県　県立吉原高等学校２年
☆銅　賞　「コノハの不思議な夏」
　　朱　宮　奈々葉　愛知県　県立一宮南高等学校２年
☆銅　賞　「少女と虹の橋」
　　佃　　遥　佳　京都府　府立北嵯峨高等学校３年
☆銅　賞　「８月のトレジャーハンター」
　　上　杉　ほのか　福岡県　県立筑紫丘高等学校１年
☆銅　賞　「子狐の筆」
　　東　福　洋　美　福岡県　中村学園女子高等学校３年
【学校賞】　同志社女子高等学校（京都府）
【奨励賞】　藤ノ花女子高等学校（愛知県）、翔凛高等学校（千葉県）

第18回　受　賞　作　品

☆金の星賞　「セミのぬけがら」
　　山　木　晴　香　大阪府　大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎１年
☆銀の星賞　「狐とおばあさん」
　　西　部　　響　京都府　府立北嵯峨高等学校３年
☆銀の星賞　「竜の子」
　　藤　川　諒　子　徳島県　県立富岡東高等学校２年
☆銀の星賞　「月とトマト」
　　瀬　口　愛　奈　福岡県　県立修猷館高等学校３年
☆銅の星賞　「くじら座の物語」
　　千　葉　澪　奈　岩手県　県立一関第一高等学校３年
☆銅の星賞　「ゆうたの夏祭り」
　　尾　下　陽　菜　東京都　女子学院高等学校２年
☆銅の星賞　「ミレニアムドラゴンベイビー」
　　小　山　夏　子　神奈川県　カリタス女子高等学校３年
☆銅の星賞　「翡翠」
　　餘　吾　美夏生　神奈川県　県立茅ケ崎北陵高等学校２年
☆銅の星賞　「どんなに小さくても」
　　長　倉　佑　夏　静岡県　県立吉原高等学校３年
☆銅の星賞　「月の手記」
　　山　本　彩　乃　広島県　広島市立舟入高等学校１年
☆銅の星賞　「おじいちゃんと人魚様」
　　寺　地　菜々海　鹿児島県　県立川内高等学校３年
【学校賞】　日本女子大学附属高等学校（神奈川県）
【奨励賞】　兵庫県立姫路工業高等学校（兵庫県）

第19回　受　賞　作　品

☆金賞　「普通じゃない」
　　藤　川　諒　子　徳島県　県立富岡東高等学校３年
☆銀賞　「二〇〇円のおばけ」
　　廣　見　結　菜　広島県　福山暁女子高等学校２年
☆銀賞　「悲哀のひまわり」
　　岡　本　沙慧可　山口県　梅光学院高等学校３年
☆銀賞　「自販機」
　　大　城　涼　佳　沖縄県　県立小禄高等学校２年
☆銅賞　「土澤駅」
　　梅　村　琴　音　岩手県　県立一関第一高等学校１年
☆銅賞　「国と大蛇とこどもたちの話」
　　中　林　綾　音　群馬県　東京農業大学第二高等学校１年
☆銅賞　「ゆうなぎのうた」
　　伊　藤　珠　花　埼玉県　県立上尾高等学校３年
☆銅賞　「ちいさな森の物語」
　　仙　波　智　晴　富山県　県立高岡高等学校２年
☆銅賞　「宝石のひとみ」
　　山　木　晴　香　大阪府　大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎２年
☆銅賞　「熊狐物語」
　　岩　木　彼　方　岡山県　県立岡山一宮高等学校３年
☆銅賞　「鈴ラムネ」
　　片　山　　恵　熊本県　県立玉名高等学校１年
【奨励賞】　神戸星城高等学校（兵庫県）

第20回　受　賞　作　品

☆金賞
「縞猫」
賀　来　心　音　埼玉県　浦和明の星女子高等学校１年

☆銀賞
「鯨のオーエン」
七　海　千　夏　福島県　尚志高等学校２年

☆銀賞
「土産」
青　野　有　佳　石川県　金沢大学附属高等学校１年

☆銀賞
「窓ぎわの友達」
柿　沼　希　実　京都府　同志社女子高等学校３年

☆銅賞
「さなぎびと」
冨　樫　　煌　北海道　北海道旭川東高等学校２年

☆銅賞
「時計台」
牧　野　優　芽　北海道　北海道札幌国際情報高等学校２年

☆銅賞
「名もなき羊飼いの話」
白　井　拓　斗　千葉県　県立柏高等学校３年

☆銅賞
「物売りは値段を付けない」
土　屋　喜　楽　神奈川県　県立金沢総合高等学校３年

☆銅賞
「空からのデリバリー屋さん」
落　合　紗也華　京都府　同志社女子高等学校３年

☆銅賞
「仮面屋」
松　末　まどか　愛媛県　県立松山西中等教育学校１年

☆銅賞
「トンボのおっさん一人旅」
岩　松　香　弥　福岡県　県立筑紫丘高等学校１年

☆銅賞
「空の海の散歩」
宮　田　千　晴　鹿児島県　れいめい高等学校１年

【学校賞】　同志社女子高等学校（京都府）
【奨励賞】　北海道札幌国際情報高等学校（北海道）

第20回　ノミネート記念作品

☆「刻は黄昏」
花牟礼　由　依　北海道　北海道札幌国際情報高等学校２年
☆「セミのあのこ」
藤　野　胡　花　岩手県　県立一関第二高等学校２年
☆「桜の恋人」
岩　倉　瑳　南　宮城県　聖ウルスラ学院英智高等学校１年
☆「銀時計と一歩」
戸　澤　和　貴　宮城県　県立宮城県仙台第二高等学校１年
☆「雨降らしの木」
増　渕　　馨　茨城県　県立下館第二高等学校２年
☆「星の約束」
髙　橋　瞬　次　埼玉県　春日部共栄高等学校３年
☆「飛行艇」
佐　藤　綾　香　千葉県　植草学園大学附属高等学校２年
☆「魔法のスケッチブック」
須之内　ゆ　り　千葉県　西武台千葉高等学校２年
☆「時の旅狐」
林　　倫太郎　東京都　都立北園高等学校３年
☆「わたしの絵」
川　﨑　日　瑚　東京都　東京家政大学附属女子高等学校２年
☆「幸せのりんごの木」
河　村　春　果　東京都　三輪田学園高等学校１年
☆「イエネズミのチカちゃん」
手　塚　舞　子　神奈川県　日本女子大学附属高等学校３年
☆「みるちゃんのめがね」
加　納　真　奈　愛知県　県立時習館高等学校１年
☆「普通の僕と普通じゃない千佳君」
河　原　桐　子　愛知県　県立時習館高等学校１年
☆「喪失屋」
菅　谷　翔　大　愛知県　県立時習館高等学校２年
☆「サラと、ナゾの、セカイ」
長　井　華　蓮　三重県　高田高等学校１年
☆「扉の先に」
小　嶋　深　友　岐阜県　県立恵那農業高等学校１年
☆「地蔵の木」
松　井　美　薗　兵庫県　県立姫路工業高等学校１年
☆「くものお菓子屋さん」
原　口　来　瞳　兵庫県　県立武庫荘総合高等学校２年
☆「君に、届け」
戸　田　菜　月　広島県　県立福山誠之館高等学校１年
☆「真朱の海」
八　戸　日向葵　福岡県　県立筑紫丘高等学校１年

選考委員

（五十音順）

石野（いしの）　晶（あきら）（小説家）

岩手県出身。二〇〇七年に『パークチルドレン』で第八回小学館文庫小説賞を受賞し小説家デビュー。二〇一〇年には『月のさなぎ』で、第二十二回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞。

牛崎（うしざき）　敏哉（としや）（宮沢賢治記念館学芸員）

岩手県花巻市出身。学芸員、日本こどもの本研究会会員。絵本評論賞（すばる書房）、国民文化祭児童演劇脚本賞、「縄文まほろばの詩」大賞等受賞。また「劇団らあす」にて演劇活動を展開。

夏井（なつい） 敬雄（たかお）（富士大学教授）

岩手県久慈市出身。國學院大学文学部文学科卒業。岩手県立総合教育センター教科領域教育室長、岩手県高等学校文化連盟文芸専門部長、岩手県立岩泉高等学校長、岩手県立大船渡高等学校長を歴任。「日本語の世界」等の講義を担当。

やえがしなおこ（童話作家）

同人誌「びわの実ノート」（松谷みよ子責任編集）童話教室に学ぶ。『雪の林』で第十五回椋鳩十児童文学賞、第二十三回新美南吉児童文学賞を受賞。物語、絵本、紙芝居作品など。岩手県在住。

第一回からの受賞作品（金賞・銀賞）は、童話大賞
公式ウェブサイトに掲載しています。

http://www.fuji-u.ac.jp/koukousei-douwa

全国高校生童話大賞受賞作品集

発行日／ 2022 年 12 月 10 日

発　行／**全国高校生童話大賞実行委員会**
富士大学
花巻市
花巻市教育委員会

事務局／〒025-8501　花巻市下根子450-3　富士大学内
全国高校生童話大賞実行委員会事務局

◆本作品集に掲載の文章・イラスト等の無断転載を禁じます。